だからもう高校三年だって！

kuroriko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だからもう高校三年だって！

【Nコード】
N7362S

【作者名】
kuroriko

【あらすじ】
時間は巻き戻しはできない。絶対にどんなに幸せな時でも戻すことは叶わない。だからその幸せな一瞬一瞬を全力で楽しみ、全力で愛さなければいけない。時間というものは無限ではない。俺は古城佳奈と出会いそれを痛感した。……幸せな瞬間が永遠に続きますようにと俺は祈ったのだった。

春休みが終わった次の日に俺は古城佳奈と出会う。

恋愛には全く興味がない男と少しクール？で一途な女が作り出す青春の日々。

彼女の熱い熱い愛情を受け止められるか！？

ゆとり世代の高校生だけど書いてみる！（純愛青春ストーリーです）

1　急展開

時間は巻き戻しはできない。絶対にどんなに幸せな時でも戻すことは叶わない。だからその幸せな一瞬一瞬を全力で楽しみ、全力で愛さなければいけない。時間というものは無限ではない。俺は古城佳奈と出会いそれを痛感した。……幸せな瞬間が永遠に続きますようにと俺は祈ったのだった。

暖かくなり桜も舞う季節、長かった春休みも明け学生の大半は嫌いであろう学校へと登校の最中だ。
「はぁ～もう三年か～早いよな～」
と憂鬱な気分で、よくいつも一緒に登校しているクラスメイトの吉見大輔に話を振った。
「嫌だよな。俺、就職すっからもう女子と出会う機会が減っちまうし！」
また女の話か・・・俺は正直どうでもいい。今までで一回も本気の恋というやつをしたことがないからだ。
「そんなに女子と付き合いたいのか……？」
「は！？何言ってんの？付き合いたいに決まってんじゃん。お前は多少顔がいいからそんな事言えんだよ！」
少しイラッとした声音で言ってきた。
俺は女・・・いや恋愛には全然興味がなく告白されたこともあったが全部振っている。理由は自分でも分かっている。その子のことを

全然好きになれないからだ。
「……はぁ～朝からうっさいなぁ、三年だから進路の事で色々と悩んでるんだから、恋愛なんて興味ないっての」
「リア充め」
最後の言葉の意味は分からなかったから無視をし、黙って登校することにした。ってかバカに何を言われようと痛くも痒くもないけど・・・。

教室に着き、ＳＨを済ませすぐに始業式となった。

校長先生が「皆さん元気に登校してきてくれて、校長は嬉しいです」といったお決まりの事を言っていた。……俺が見る限り誰一人として元気な顔などしていない。それどころかため息ばかり聞こえる。……どうやら校長の眼球と耳には特殊加工が施しているらしいなどと考えながら暇な時間を過ごした。
なんとなく欠伸をしながら周りを見ていると、俺と同じで欠伸をしてる奴、器用に立ちながら寝ている奴、なんか顔をしかめて明らかに機嫌が悪い奴までいる。しかも女子。

(あの子なんであんなに機嫌悪そうなんだ？って考えたって分かる訳ないか)

時間は過ぎて行き、三年生なんだから気合入れろとの担任からの長い話が終わり下校になった。

俺は早速大輔と帰ろうとした。
「大輔、行くぞ～」

「今日部活あんだわ、悪いけど先帰ってくれ」
大輔は不真面目なくせに部活だけは真面目に行っている。
野球部で一年生の頃からエースとして頑張っている。足を引っ張るわけにもいかない。
「今日からもう部活あんのか〜大変だな」
「おう、今年こそは甲子園に行くために頑張ってくるよ」
「そっか、それじゃ足引っ張れないな。また明日な」
おう、と短い返事をし大輔は教室を出て行った。

さて俺も帰るかと思い鞄を持ち上げた時、後方から俺を呼ぶ声が聞こえた。
「力也ぁーもう帰るの？」
俺に話しかけてきた子は〈綾瀬咲〉この子は少し苦手だ。一年生から同じクラスで一年生の三学期に告白され、それを振ってしまったからなのだが……どのような会話をすれば良いのか正直分からない。
「んー？綾瀬さん何？俺もう帰るけど」
綾瀬さんはそんな俺にでも友達感覚で良く話しかけてくれている。
「暇なら一緒にお昼ごはん食べに行こうよ。あ、二人っきりが嫌なら他にも呼んでさ！」
最後の言葉の心情は分からないが、明るい笑顔で誘ってくれている。
「綾瀬さんと二人っきりでももちろん構わないけど、綾瀬さんと一緒だと補導とかされそうだしなぁ〜」
綾瀬さんは髪を茶色に染めているので最初の頃はヤンキーかと思っていた。
「また髪！？オシャレなんだから良いじゃん！あ、もしかして似合ってない！？」
「冗談だって、どうせ一人で食べるくらいなら一緒に食べたほうが楽しいし付き合うよ」
綾瀬さんは機嫌悪くしていた顔から、笑顔を見せてくれた。……楽しくなれば良いんだけどな気が重い……。

「よし！そ、そうと決まったらどこ行きたいですか？」
緊張しているのか急に敬語になった。こちらまで緊張するじゃないか。

そして他愛も無い会話をしながら学校の敷地内から出ようとしたその時。
「あなた達二人でどこ行く気なの？」
と、明らかに不機嫌そうな声で尋ねてきた。
顔を上げて顔を見てみると、女にしては身長は高めで手足がスラっとしていて、体系もスラッとしていて細い印象を受けるが出るところはキッチリ出ている。髪はキレイな黒髪で長さは腰のあたりまである。目は二重で顔は美人だが近づきにくい存在を放っている。……始業式で機嫌が悪そうにしてた子だ。
「えーと、昼飯を食べに行こうかと思ってたんだけど？」
「あなた達二人が平日の昼間に制服を着たまま街をぶらぶら歩いているとこの学校の印象が悪くなるじゃない」
なにも言い返せないぞ……これは。そこに隣から声が発せられた。
「ごめん。古城さん一回帰ってからにするね」
としょんぼりとした顔で言った。
「何？彼氏さんのほうは何か私に言いたそうな顔してるね」
「俺等のほかにだっ――」
言葉の途中で綾瀬さんに袖を引っ張られた。これ以上は言っても無駄ってことだろう。ってか彼氏ってとこだけは訂正したかったり……。
「分かった一回帰ってからいくことにするよ」
「それなら問題はないから大丈夫よ」
と冷たい表情で言われた。

その後、家に帰らずに昼食を取り、家に帰った。
綾瀬さんから聞いた話ではあの子の名前は「古城佳奈」一年生の頃一緒な部活に入ってたらしい。たしか綾瀬さんはバスケ部だったと思う。だけど二年生になる前に辞めてしまった。と辛そうな顔で話していた。綾瀬さんもバスケ部はそのくらいの時期に辞めている。なにかあったのだろうと気になったが、触れない方が良いと判断して話を変えた。……俺も過去の事なんて詮索されたくないもんな……。

ベッドに横になりながら今日のことを思い出す。
あの子なんであんなに不機嫌だったんだ……？

◇◆◇◆◇◆◇
次の日、大輔と登校中。ふと何気なく聞いてみた。
「大輔ん家って朝飯いつも何食っててんの？」
「あ~俺はいつもご飯だな。今日はポテチを砕いて振りかけて食べたけど」
……何言ってんの？このバカは、何振りかけたって？
「ぽてちって何？そんなジャンルのフリカケあんの？一回味見してみたいな」
「何言ってんの？ポテトチップスだよポテトチップス」
……何言ってんの？ポテトチップスって何か知ってんの？
「あぁ、あれ美味いよな。バリッとした触感とかサイコーだよな」
「……力也……お前なんで棒読みなんだよ！食ったことないだろ！？一回食ってみろって案外いけるんだぞ！」

俺は、あぁと適当に言い頭の中でご飯とポテチのコラボを想像していた。……うん、有り得ない。

こんなバカな会話をしているとすぐに学校に着いた。

教室に行き席に着くと、昨日と同じく後方から声をかけられた。
「白泉力也！ちょ、ちょっと来て」
と小さめな声で呼ばれた。顔を上げ顔を見ると……古城佳奈……
「なんだよ、俺なんかしたか？しかもフルネーム！？」
「い、いいからちょっと付いてきてよ！」
昨日と態度が違うような気がしたが腕を引っ張られていたので半強制的に連れていかれた。

人気のない三階に行くと理解ができない一言が飛び出した。

「あ、あの昨日の事は忘れてほしいの」
「え？うん、もう別に気にしてないから」
「ありがと」
と小さな声で顔を俯きながら言った。
「でも、意外だったよそんな事言うなんて」
「……ここで言えなきゃ……もうチャンスはないかも……」
と俺には聞こえないくらいの声で言った。
「え？何か言った？」
五秒後、俺は夢を見ているんだと自分に言い聞かせた。

「す、好きでした。一年生の時から……こんな私で良ければつ、付き合ってくれないでしょうか」
これが大輔が言ってた夢オチってやつか。そろそろ夢から覚めるのかな。……おい早く覚めろよ。
……結局覚めることはなかった。

だから恋愛なんて興味ないんだって、ってかもう高校三年生だってのに付き合ってる暇なんかあるか……！っていうか急展開過ぎ……。
……俺はこのあとこの女に恋をする。それが俺の最初で最後の恋。
これから送る青春の日々は絶対に忘れないものとなるだろう。

1　急展開（後書き）

一話だけでも読んでくださって、この時この時間はもう戻らないんだな。と痛感して頂ければ良いなと思います。一瞬一瞬を全力で生きてください。……大袈裟ですね……ごめんなさい。

話しは変わりますが、個人的に三話か四話くらいまで読んで頂いてもらえると嬉しいです。これならどうにか読めるレベルかな？と感じて頂ければ先もぜひぜひ読んでやってください！作者が喜びます。

駄目だしやコメントはいつでも待っております！

最後になりましたここまで読んでくださってありがとうございました！

追記　最近になってようやく、三点リーダーなるものを知りました。もう遅いですよね。はい。　一応全部の話を修正しました。

2　返事

衝撃的すぎる印象を残したあの告白から九時間ほどたった。
「はぁ〜……どう断るかな。進路以外の悩みが増えるとはなぁ〜……」
鬱々とした気分でベッドに腰をかけながら思う。

あの告白の返事は待ってもらっている。その場で断る言い訳が見つからなかったからだ。

「は？何？え？？」
俺は言葉にならなかった何を言ってるのかも理解ができなかった。
「だ、だからあなたの事す、好きなんだってば！」
「……本気？からかってない……？」
ツキと睨み俺の目を見てしっかりと言った。
「怒るよ？本当に好き。ここまで恥ずかしいこと言ったのは人生で初めてなんだから」
「……そっか」
いまだに整理できてない頭でそう答えた。
「で……あの返事は……？」
俯きながら聞いてくる。
「……ごめん、もう少し待ってくれるか、急すぎて戸惑っている。」
顔上げ怒っているとも悲しんでいるとも思えない顔で一言。
「うん、分かった。私本当にあなたの事好きだから良く考えてみて。

絶対に幸せにする」

「なるべく早く返事返すよ」

といい彼女は自分の教室へと戻っていった。

「男が幸せにするってならかっこいいんだけどなぁ、女に言われる男って……はぁ～……」

朝に告白されたのでそのあと教室では大輔がしつこく「あの子だれ！？」と聞いてきた。

「大輔か……」

～～～♪♪ケータイが鳴ったメールの着信音だ。

ケータイを開いてメールを見ると

「力也あの子だれだよ？教えてくれよ！気になって寝れないんだよ！！古城佳奈とはどんな関係！？」

「……アイツ調べたな」

素っ気無く返信してやった。

「お前知ってるじゃん、古城佳奈。以上。」

その後もケータイが鳴っていたが無視をし、風呂に入り夕食を食べて寝ることにした。

◇◆◇◆◇◆◇

朝、眠い眼をこすりながらベッドから降り一階へと向かった。
扉を開けると、香ばしい食パンの焼いた良い匂いが俺を出迎えた。
だが…毎日同じものというのは正直飽きる。
「っはぁ～……また食パンか～母さんたまにはご飯とか一」
ご飯とかが良いと言い切る前に言葉を遮られた。
「何言ってんの、食パン食べれないような人達だっていっぱいいるんだよ」
「分かってるけどさ～……」
「文句言わずに早く食べて学校行きなさい」
「……へいへい」
食事を済ませ、支度を整え自宅を出る。
俺には一個下の弟がいる。サッカーが強い学校に行き、毎日二十一時ごろに帰ってくる。俺は部屋にいるのでほとんど顔を合わせることはない。昔は俺もサッカーをやっていた……まぁ、いいか思い出したくもない。

大輔と合流し一緒に登校をする。
「昨日なんであのあとメール返信しねぇーの？！」
「あー……ケータイ充電切れたからそのまま充電してたら忘れてたわ……すまん」
「平気で嘘つくなよ！俺電話したら普通に繋がったじゃねぇか！出てこなかったけどよ」
っち、そういえば電話までかけてきていたな。
「……また今日の体育外周だってよ。嫌だよなあ～」
「何話すり替えようとしてんの？んで古城との関係は？」
正直俺も関係なんて言われたって分かるはずもない。
「俺が聞きたいっての……」
「何それ？まさかお前のこと好きだったり」
「……まさか、ありえないだろ」

「言ってみただけだっての」

そうこうしているうちに学校に着いた。
玄関で上履きを履き、教室に向かう時、階段から降りてくる古城の姿が目に写った。
「はぁ……はぁ……」
なぜだか浅く息を繰り返してる。走ってきたようだ。
「えーっと、おっす、どうした？朝から」
ひとまず挨拶をしてみた。大輔は隣で「え？また？！」って小声で言ってるのが聞こえたが今は黙っている。
「い、今教室からあなたが来るのが見えたから走ってきたのよ」
呼吸も次第に落ち着いていき、視線を合わせないまま言った。
（ヤバイ返事考えてないぞ、どうする……？）
すると隣の大輔が
「俺先行ってるな。」
……俺一人か……まぁ、一人のほうが良いかもしれないが……。
「えっと、返事のことなら―」
「こ、こっち来て」

と、また人気のない三階に連れてこられた。
「返事聞かせてもらえる？」
正面から眼を見つめながら言われた。
正直かなり照れる。
だが、正直に言うしかない、付き合う気はない……と
「古城さんごめんな、俺付き合―」
その時俺は思考が止まった。

彼女の柔らかな唇を俺の唇に触れさせてきた。
俺のファーストキス……いやそんな事考えてる場合じゃ……どうすんの？俺？意味わかんんね。諦めるなよ俺の脳内回想……。

「っ」
と彼女は唇を離し可愛いらしい音を立てた。
「わ、私のファーストキスをあげられるのはあなただけ。これでも駄目なの？」
泣きそうな顔で俺に問いかけてくる。
俺は……彼女の行動が今だに整理がつかず声にならない音を出している。
それでも彼女は続ける。
「もっといっぱいしてあげるっ。これからもっと恥ずかしいことだって私は耐えられる！」
まだ続ける。
「だから私を彼女にしてそして一生を共にしてほしいっ！」
プロポーズ……逆プロポーズってやつか。かっこいいな、くそっ。
あぁ、なるほど昨日夢が覚めないなぁと思ってたらまだ続いてんのか！夢オチだっけ？これって意外と長いんだな。いつ覚めるんだろうな。
………覚めない。さて……そろそろ真面目に考えないと取り返しがつかなくなる。
「ちょっと待て！古城さんの行動が俺には理解ができない！」
「これが私！これが私の愛情表現なの！もういいから付き合いなさいよっ！」
最後の言葉でとうとう泣き出してしまった。

俺は……俺は……。

「はぁ〜……！！分かった！分かったから泣くなよ」
は……？どうしちゃったの俺？何言ってんの？今すぐ取り消せ今の言葉を……！

「な、なにが分かってっていうのよ……」
涙を流しながら返事を返してくれる。

「お、俺、白泉力也は今日から古城佳奈さんの彼氏にしてください」
はぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？？俺、何言ってんの？意味がわからない。こんな物語書いている人でもなに書いてんの？って思うような展開だぞ・・・何？女の涙に弱いってやつ？え？

「っ！！だ、大好き本当に愛してるっ嬉しい。どうしよう涙が……」
この光景を他の誰かに見られたらどう映るのだろうか？俺がいじめている？それとも修羅場？それはまずいと思いとにかく場所を移すことにした。
「とにかく泣くのはやめてくれ。俺が泣かせてるみたいだし……」
「あなたが泣かせたのよっ……」

……そうなるのだからなんとも言えない……。
ひとまず一限目は出られないな。放っておくわけにもいかないし。

俺は三階の一限目使われない様子の教室の中で時間を過ごすことにした。
俺の初彼女、古城佳奈と二人っきりで……。
「一生私を大切にしてね。私はあなた……力也君のことを一生大切にするから」
俺は「うん」としか頷けなかった。頭ん中ではなぜOKを出したのかが分かっていない。でもなぜかこの子のことが気になったらOKしてしまっていた。やっぱり涙にやられたんだろうなぁ……どうすんのよこれから。俺の脳内回想、仕事してくれこれからどうすれば良いかを教えてくれ。

俺この子のこと好きになれるのか?!どうすればいいんだ彼氏って何デートとかしたことないぞ?俺!
もうわからん。なるようになれ!!

2　返事（後書き）

楽しくかけました！（後半自分でも意味わからなくなっちゃいましたが……）

多少ギャグ的な会話が増やすことができればなぁと思うのですが、ギャグセンスない僕には厳しそうです……。

駄目だし、コメントお待ちしております。

特に駄目だしを……！もっと上手くなりたいです。アドバイスくださると嬉しい限りです、はい。

3　理由

あれから三十分ほどの時間がたった。今では古城佳奈も涙を流してはいない。
今から教室に戻るわけにも行かないのでこの時間だけはここで過ごすことにした。保健室で寝てたとでも言えば大丈夫だろう。
と、その時。
「あっ、そうだメアド！メールアドレス教えて」
「あいよ」
ケータイを取り出し赤外線通信をする。
「やった……ずっと知りたかったアドレス」
「……なんで古城さんは俺なんかのことをそこまで好いてくれんの？」
これだけは聞いておきたかった。
「知らなかったでしょ？私、力也君と一緒な中学だったのよ」
驚いた。だが知らなくてもおかしいことではない。俺の中学は県内でもかなり人数の多い学校だったからだ。
「知らなかった。そうだったんだ。でもそれで？」
これでは理由になっていない。
「うん。私、友達に誘われてサッカー部の試合に初めて見に行ったのよ。そしたら力也君がいた」
「っ……あ、そうなんだ……」
俺は正直怖かった。あのサッカー部のことは思い出したくもない。
「そんな顔しないでよ。私はあなたと一緒だから」
「もしかして……バスケ部のこと？」
「うん、そりよりも私はその試合を見た時から力也君の事を好きになった。それはもう毎日考えるほど。一目惚れだったのよ」
好きになってからは俺の様子を見に来てもいたらしい、そして性格も大好きだと言った。

「力也君のサッカー部を辞めたことは色々と噂で聞いたことがあった。それでも想いは変わらなかった」
「俺のあんな噂を聞いても……？」
「うん、力也君からの話しか信じないことにしたの私はでも今はその真実は聞かない」
正直にありがたかった。話す気にはなれなかった。
「私も、部活をやっていたのよ、中学から高校一年生の後半まで」
……退部したことは綾瀬さんから聞いていた。
「綾瀬さんから聞いたよ、でもなんで？……っては俺も聞かないことにするよ」
俺は最後のほうは笑って言った。
彼女は本当に俺を好きでいてくれていることが本当に暖かく照れくさかった。
「俺、恋愛なんて興味なかったけど古城さんと出合って初めてこんな気持ち味わったよ」
「ふふっ、嬉しいっ。やっとこの想いが力也君に届いた」
微笑む顔を見て俺は抱きしめたいという衝動に駆られたがどうにか抑えた。
「よし、そろそろ時間だな。古城さん先にここから出て。一緒にいるところ見られたら何言われるか分からないしさ」
「私は逆に見られたいけどね〜。なんてね流石に少し恥ずかしいかな」
キスまでしてきて恥ずかしいのか……まぁ、ちょうど良かったわけだけど……。
「冗談言ってる場合じゃないって…古城さー」
またキスをしてきた。彼女はキス魔なのか……？だとすると俺はとてつもなく嬉しい……。
「っちゅ……今から古城さんは禁止。佳奈って呼んでよ」
「キス魔……？あ、違っ……えっと、恥ずかしいな……か、佳奈っ！」

恥ずかしくて名前のところを強く呼んでしまった。
「う、嬉しい。そんなにハッキリと……て、照れるじゃない……あ、キス魔は嫌い……？いやならあまりしないけど……？」
俺の彼女可愛すぎるだろ……もう抱きしめたい。この一時間でどれだけ俺の気持ちは変化してんだ。
でも、この変化は心地良い。
「いや、キス魔だと正直かなり嬉しい」
ハッキリ言いすぎだ……俺。
「う〜〜……っちゅ、きょ、今日はこれで最後だからねっ！」
「お、おう」
このラブラブイチャイチャしているのは本物の俺なのか？今更夢オチとかじゃないよな？

その後お互いの教室に戻った。
二限目から授業を受け。昼休みになった。
「力也！古城佳奈とは本当どんな関係なわけ？もう言い訳できねぇぞ」
一限目がいなかったことどんなにバカな大輔でも分かるので言い訳はできそうにない。
「彼女」
と短く告げた。恥ずかしいもんだな……。
「は……？」
固まった。ん？チャンスかこれはこの隙に違うところで昼飯食うか！？
よし、そうと決まれば、イスを引こうとしたところ、ガタッっと音がしたもちろん俺のイスからではない。大輔のイスだった。なぜに

……立つ……。
「何言ってんだよ！意味わからん！！バカが！！！」
「声大きいっての、バカはお前だっての」
と、その時後ろから声がかけられた。
振り向くと、綾瀬さんだ。
「おー、綾瀬さんも一緒に昼飯食べる？大輔の席、今空いたみたいだけど」
「うん？お、本当だ空いたっぽいね！それじゃあ、この席で一緒に食べようかなっ」
「空いてねぇよ！」という大輔を言葉を無視し綾瀬さんは言った。
「どうぞどうぞ」
「良くねぇよ！綾瀬お前女子の友達いないのかよ!?」
コイツなんてこと聞きやがる……まぁ、気になるが……。
「いるよ！少なくてもバカな大輔よりはいるよ！バカ！」
バカって呼ばれてる。
「う……なんで俺が友達少ないの知ってんだ……？」
あぁ、負けた。バカって言われたことも突っ込めないとは。

綾瀬さんと大輔とで楽しい昼休みを過ごした。
てか……俺も友達少ないんだよな。大輔って部活やってて友達少ないのには負けるが……泣けてくる。

綾瀬さんには、古城さん……佳奈の事を話しておいたほうが良いかとも思ったが今はやめておいた。大輔も忘れていることだし、蒸し返したくはなかった。それよりも、その話を聞いて綾瀬さんはどんな顔をするのだろうか……付き合ったって報告するのはもしかすると残酷なことなのかもしれない……。

午後に授業も受け終わりすぐに放課後となった。大輔も部活なので俺はすぐに帰宅しようとも考えたがすぐに佳奈の事を思い出し、ケータイを開いた。

「な、なんだこれ……メール四十二件……着信履歴十五件……」

……え？なにこれ怖いんですけど、何？ハッキングってやつ？いまいちわからんけど、もしかして俺のメアドとかネット上で流れてるのかな？あー……どこに電話すれば良いんだろ、警察かなやっぱ。

泣きそうになりながらもどんなメールが着ているのか気になり開いてみると。

『古城佳奈』
「どうしたの？なんで返信しないのよっ！！浮気！？早くも！？なんでっ！？」

この一件を見てまたケータイを閉じた。俺の彼女はどうやら相当怖い。あーこれはサプライズドッキリってやつかな。それだとちょっと怖すぎるかな。最初なんだからもっとお手柔らかにしてほしいなぁ……

俺このメールあと四十一件も見たら本当心臓飛び出しちゃうなぁ〜一日一件ずつ見ていくかな。うん、決まり。

そう決断して教室でブルブル震えていると「ドンッ！」という物音がした。教室に残っている皆が一斉に音のしたほうを振り向く。
「ちょっと！なんで無視してんのよっ！バカ力也君っ！！」
あー……俺もバカって言われた早く言い返さなきゃ大輔と同じになってしまう。
「おい、バカってひど一」
「浮気しないでよっ！！バカ！」

してねぇよ……てかバカ言うな……。
周りでざわざわと声が聞こえてきた「あの子だれ？白泉の彼女？」
とか言ってやがる……。
「ちょっと待てこっち来い！」
無理やり腕を取って学校の外に連れ出した。

連れ出す間もずっと大声で喚いていたが俺は無視し、近くの公園まで連れてきた。
「すまん、普段学校であまりケータイ見ないからさ、メール気がつかなかった」
「……本当？無視とかじゃない？」
「本当。無視じゃない」
「そう、それなら良かった。私嫉妬深いの……しかもかなり一途……自分で言うのもなんだけど……」
うん、本当にいやってくらいに分かった。嫉妬とかって無茶苦茶ホラーってことが分かったよ。
「ははっ！本当に嬉しいなあ、暖かくて居心地がいい。この場所は俺だけのものなんだよな？」
照れ隠しに笑いを入れながら尋ねてみる。恥ずかしい台詞だな。ホント……。
「うんっ、力也君以外誰にもこの場所は譲らない私の隣は力也君の特等席っ」
満点の笑顔でそんな事を言ってくれた。はぁ～この一日は俺の歴史を変えた一日になった。
「そういえばなんで昼休みは来なかったんだ？」
顔を少し赤らめながら言った。
「だ、だって！は、恥ずかしいじゃない。教室にお昼ご飯食べに行ったら皆にバレちゃうでしょ？」
あーなるほど……そこは恥ずかしいんだ。なんとなく分かってきた

気がするぞ。

少しキツめで一途な女、古城佳奈。恋愛経験ゼロ基本無気力な男、白泉力也。

この二人は今日をもって恋人同士となった。

だが、白泉力也の口からはまだ一度も「好き」という言葉は出ていない。

3　理由（後書き）

今回も楽しく書けました。
好きな理由は一目惚れとの事ですが……やはり個人的には一目惚れが一番長く続く形だと思っています。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

4　初○○ト！

俺と佳奈は二人で一緒に帰った。帰ったと言っても佳奈は電車で通学しているので、近くの駅まで送って行ったのだ。
明日はやっと、週末か。今週は本当長かった・・・今週って言っても三日しか行ってないけど……。
俺は家に帰りすぐにパソコンをつけた。そして検索……。
「デートの基本っと」
……こんな事調べる男って……いや！でも普通に男でも見るんじゃないか？これくらいは！
調べていると、男性は相手に合わせて楽しいトークをするとか・・・常にあいての顔色をうかがうとか……男性が相手をリードしろ……だと？いやいや、基本なのか？これ。あ……初心者用ではないのか。
検索やり直すかな。
「デート初心者っと」
……ほとんど一緒な事書いてあんだけど……初心者レベルで俺からしたらかなりの上級者向けみたいな……。頭を抱えているとケータイが鳴った。
「古城……いや佳奈からかな」
少しにやけてしまった。自分で言うのもあれだが気持ち悪い……。
予想通り佳奈からだった。
『古城佳奈』
「明日、なにか用事でもある？もし良かったら一緒にどこか遊びに行かない？」
んー……感動するなぁこんな日が来るなんて思ってもなかったからなぁ～
たぶん、デートしない？ってところを消して遊びに行かないって書き直したんだろうなぁ～って想像してしまう。

俺はすぐに返信した。
「暇！遊びに行こう！どこ集合が良い？あ、何時ごろ？」
送って数十秒で、返事が返ってきた。
『古城佳奈』
「やった！それじゃあ駅まで来てくれる？そうね……１０時頃はどう？」
１０時か……いつも俺は休みの日はお昼まで寝ているので……そんな事どうでも良いな、どうせ答えは決まってる。
「了解。それじゃ明日迎えに行く！」
んー……街でぶらぶらするしかないかな。映画とか好きなのかな？初デートだし……緊張する。
するとまたメールが。
『古城佳奈』
「ありがと！楽しみにしてるね！」
ニタァ～と顔がほころんでしまう。……気持ち悪い。
三日前はこんな感情が生まれるなんて思ってもなかったな～。どちらかと言うと苦手なタイプだったし。でも三日前の俺がおかしかったんだ！って思えるようになってきた。良い傾向だと少し思う。
俺はパソコンで検索しても成果はないと判断してパソコンの電源を落とし。風呂に入り、ご飯を食べて寝ることにした。
明日楽しみだけど、緊張の方がでかいなぁ～……。

◇◆◇◆◇◆◇
朝になった。いや……もう昼！？……なんてミスは俺はしない！
よし、寝過ごさなかった！
こんな事で喜んでいて良いものだろうか？と考えたが、初デートで

遅刻なんてことはありえない。喜ぶべきなのだろうと判断した。
余裕を持って起きたので準備を入念にし、服装も少しシャレた感じにした。普段はあまり付けないネックレスまで付けた。髪もワックスで少し立たせスプレーで固めた。学校に行く時は寝る時間が一分一秒でも惜しいので、あまりワックスなどを使わない。
変に思われないかな？コイツ何決めてきてんの……引くわー……とか……ないよな！？
そろそろ時間なので自宅を出ることにした。

歩いて十五分くらいで駅に着いた。
駅に向かっている間ずっと緊張しっぱなしだった。
よしっ！楽しむことさえ忘れなければ大丈夫！
と自分に言い聞かせ駅の中に入った。

中に入るとすぐに佳奈を見つけた。……おーさすが俺の彼女……なんか髪の色が明らかにおかしい連中に声をかけられてる。休みの日ってこんな奴等ばっか沸くのかな。と考え恐る恐る近づき声をかけてみた。
「えーっと、おっす佳奈。」
髪の毛が赤いヤンキーAが話しかけてきた。
「あ？何お前？この子の彼氏？」
すると髪の毛が赤と金メッシュのヤンキーBも話しかけてきた。
「今からこの子と一緒に飯食いに行くんだから邪魔すんなよ」
うわ～……思った以上にこえぇぇぇぇ……。
「佳奈、この人達と飯食いに行くの？」
とりあえず佳奈は大丈夫かと思い声をかけてみた。
「行くわけないじゃない！」
おぉ、さすが俺の彼女全然平気そうだ。ってことは……俺はこいつらを追い払いさえすれば普通にデートができるということか。
「……あ、ヤンキーAs一違、赤のお兄さん、ズボン下がってます

よ。パンツ見えちゃってるじゃないですか。公然わいせつ罪ってやつですよ～」
これは殴られるかなと予想したが意外と……効果はあったらしい。
「は？え？あぁ」
ズボンを上げた……んんんん！？何この反応？俺どうすりゃいいの？
「……ははっ」
笑っちまったよ。どうしようもないんだもん……。
佳奈の手を握り、言った。
「すまん！少し走るか！」
うん、と可愛らしく笑いながら頷いてくれた。あぁ、天使のようだ。
鬼に囲まれてたのになに、この安らぎ。
走って逃げると、追ってくるとも思っていたのだが、全然追ってこなかった。

公園に入りベンチに座り息を整えることにした。
「はぁはぁ……きっつ……久しぶりにこんなに全力で走った」
佳奈のほうも息を切らしている。
「ふう～……私もこんなに全力で走ったの久しぶりだったよ」
笑いながらもどこか余裕のある顔を見せる。
「佳奈、怖くなかった？ちなみに俺かなりびびってたけど」
「少し怖かったけど、たまにあるからどっちかっていうと慣れてるのかも」
少し照れ笑いのような感じの顔をした。
「そっか、佳奈は美人だしなぁ～……」
少し複雑な気持ちながらも俺はこんな美人の彼女がいるっていう優越感もある。
「て、照れるね。ありがとっ。あ！でも私は力也君以外には興味ないからね！？」
「心配してないよ」

佳奈の焦りながら言うのを見て笑ってしまった。癒される……。
佳奈は俺を見上げ言った。
「今日は一段とカッコイイよ。私なんかのためにオシャレしてきてくれてありがとう」
照れ笑いを浮かべながら言った。
「佳奈もかなり似合ってる。可愛いよ」
佳奈はいつもは長い綺麗な黒髪降ろしているのだが今日はポニーテールにし、全体的に黒が多くみられるファッションだった。てか俺・・かなり恥ずかしかった・・・これを言えるチャラ男と呼ばれる種類の人はすごいと改めて思った。恥ずかしくないのかなぁ……俺はできればもう言いたくないけど……。
佳奈は立ち上がり言った。
「よし、やっとデートが始められるね！あ、デート……で良いんだよね……？」
はにかみながら聞いてくる。俺はすぐに答えた。
「あぁ、もちろん」

そして初デートが始まった。
俺には実は目標がある。それは……今日、佳奈に俺から「好き」と伝えることだ。
これを伝えないと俺は佳奈から信頼されないような気がしたからだ。昨日みたいにすぐに浮気！って言われるのはちょっと嫌だし……これ以上バカとも言われたくないしな……。大輔すまんな、俺はお前みたいにバカを肯定したくはないんだ。

4　初〇〇ト！（後書き）

なんだか、サブタイトルがあれですが気にしないでください。
今回も楽しく書けました！
これで四話目です！

一応皆様には三話か四話までは見てほしいとお願いしたので、ギリギリ読めるレベル！と評価をくださった方にはこれからも読んでくださると嬉しい限りです。もうこれくらいで良いかなと思われた方は次回作を書いた時ぜひぜひ読んでください。

駄目だしお待ちしております！

5　誓い

佳奈は全体的に黒が多くみられるファッションで最高にかっこいい一言を言い放った。

「今日のデートは私がリードするからね！」
ははっもう何この彼女、俺かなりかっこ悪いじゃないっすか。ちょっと男としてどうなのかと思ったので聞いてみる。
「彼氏としてそれは情けない気がするんだけど？」
「え？もしかして！プランとか立ててくれてるの！？」
嬉しそうに聞いてくる。うっはぁぁ、可愛いな！おい！プランなんてないけどな！言えない……。
「えーうー、うん一応考えてきたんだけど、それでも今日は佳奈のプランでー」
「嬉しい！もちろん力也君の考えてくれた所回りたい！」
遮られた。さりげなく佳奈様のプランに乗っかろうとしたんだけどなぁ～……。まぁ、どちらにしてももう少ししたら昼食だ。それまでここで色々とお互いの事を知っておくのも悪くはないだろうと考えた。
「お昼もうそろそろだし、ここで話でもしない？お互い知らないこと多いしさ！」
「うん、そうだねいっぱい聞きたいことあるし私は全然それで構わないよ」
微笑みながら了承してくれた。天使だ。天使がいる……！今、痛っコイツ痛いぞって思ったやつ出てこい！

それから公園で三十分ほど会話した。
兄弟はいるのか、好きな食べ物、趣味などを質問していった。合コ

ンってこんな感じなんだろうなぁと思ったが口にしないことにした。口にするとたぶん、怒られる。うん、間違いなく怒らせるとさっきのヤンキーさん達より怖いだろうし……。
だが、この会話で距離が少し近づいた気がする。色々な顔が見れた。修学旅行の時の話をしている時は嬉しそうに話をしていた。本当に楽しかったんだろうなぁと想像できた。
ちなみに友達の少ない俺の修学旅行は地獄みたいなもんだったけど。バカ、いや大輔と三泊四日だぜ？考えてもみろ。俺は朝一であいつの顔を見ることになるんだぜ。そりゃぁ、起こしたくもなくなるよな。だから俺は二日目の朝はあいつを起こさなかった。そして俺は普通に朝食を食べに下に降りた。そして点呼をとるわけだがもちろん大輔の姿はない。教師には大輔はどうした？と聞かれたが俺は「さっきまでいたんですけどね、トイレだと思います」と答えたとき後ろから大輔が現れた。
「へぇ、俺さっきまでいたんだ？俺誰かさんが起こさなかったおかげで今起きたんだけど」
起こさなかったおかげって褒められてるっぽいな照れるなぁとか思っていたりしたわけだ。
これ以上話すと長くなりそうなのでこれくらいしておこう。この先からは大輔には酷すぎる。

少し早いか？とも思ったが公園を出た。まだ十一時を少し回ったところだ。それよりも何を食べたいか聞かないとな。
「佳奈は食べたいもんとかある？」
「なんでも良いよ、力也君が選んでくれたものなら何でも食べる！」
メニューまで俺が選ぶのか？とも思ったがそんなわけないだろうという結論に至った。
「パスタとか大丈夫か？」
「うん、もちろん」

微笑みながら答えてくれた。あぁ、俺の天使ー……もうやめよう少し恥ずかしくなってきた……。
別に定番の某ハンバーガーショップでも良かったのだが、やはり初デートでそんなところに行くのは気がひけた。少し気負いすぎか？とも思ったが、そこまで高いわけじゃないし良しと思うことにする。

他愛も無い会話をし、十分ほど歩くと着いた。
外見からしてオシャレな店で少し早めの昼食を食べた。
同じものを二人とも頼み他愛も無い会話をしながら楽しい昼食の時間を過ごした。
お？これはまさか楽しい会話ってやつはできてるのじゃないか？と思ったりもしていた。

昼食を食べたあとのプランは……うん、考えてない。映画とかに行けば間違いはないか？とも考えたが一応遠回しに聞いてみることにした。
「佳奈のプランではどこ行く予定だった？」
「えっとね、映画だと会話できなくて寂しいからどうせ二人ならショッピングとか行く予定だったよ」
……あぶねぇ……地雷を踏む一歩手前で回避できたぜ。
「だよなぁ〜……映画はないよな！」
佳奈は、別に良いと思うけど初デートはいっぱい会話したい！と言ってたが聞き流した。
「街ぶらぶらして適当に見て回ろうか」
うん。と可愛らしく頷いた。

服や靴、鞄などを見て回った。
俺は服に関しては全然アドバイスとかができないので、反応に困ったが佳奈が
「この色は私には似合わないかな？」

と聞いてきたので正直に似合うと、答えた。
靴や鞄もそんな微妙な感じで見て回ったのだが、正直少し新鮮で楽しかった。

そろそろ良い時間になってきたので俺は言った。
「そろそろ帰ろうか」
「あ、うん、でもあと一個くらい一緒にお店見たいかも」
と歯切れ悪く言った。
「もちろん良いよ、んでどこいくんだ？」
「あそこの小物店とかどう？」
と指を指された先には女の子が好みそうな、ピンク色を多く取り入れている店だった。

中に入るとやはり若い女の子向けだった。う……居心地悪い……。
佳奈は入ると目を輝かせ店の中を一人でぐいぐいと進んで行く。
おー……佳奈様さすがです。この女の子の空間に男一人置いていくなんて……周りから見たら俺相当変な人だよ。・・・・・・・・・・・・気のせいか周りの子から「キモッ」って言われた気がするんだけど、そんな訳ないよね。さすがにそこまでアウェーではないはずだよね。・・・・・・幻聴はまだ続く……佳奈様……佳奈様はどこ行った！
「佳奈～」
とわざとらしく呼びながら進む。そう俺は一人でここに来たんじゃないぞ！というアピール作戦だ。
佳奈は、シルバー系のケータイストラップを見ている。
「何見てんの？」
そう聞くと佳奈は
「二つ合わせるとね。ハートの形になるんだよ」
答えになっていないが……なるほど分かったぞ。ペアルックってやつを買いにきたんだな。

「へぇ～……」
正直あまり興味がないのだが、佳奈は目を輝かせながら見ている。
「佳奈、これ俺ケータイに付けようと思うんだけど佳奈は付けてくれるか？……これペアルックってやつだしさ」
と言うと佳奈は驚いたように声をあげた。
「はぇ！？こ、これ一緒に付けてくれるの？うそ！やった！もちろん付けるよ！」
「声大きいって！ははっそれなら俺がこれの代金払うから買ってくるから少し待ってて」
「え、悪いよ、お金は私も半分出すよ。私が全額出しても良いくらいなのに……」
特に言い訳が見つからなかったので、思いついたことを言ってみる。
「初プレゼントなんだから俺からプレゼントさせてくれ。俺からこれ買っていいか？って聞いたんだしさ」
すると佳奈は目を合わせずに照れくさそうに言った。
「うん、ありがと……」
……可愛い……最初俺からこれ買うって提案したときはなんてベタなんだ、無茶苦茶恥ずかしかったのだが言って良かったと心の底から思う。

そして公園に行き、ベンチに座りお互いのケータイにハートの半分の形をしたストラップを付けた。
「ふふ、嬉しい。このケータイ一生使う！」
「一生って……ストラップさえ持っていれば付けてなくても良いだろ」
「寂しいよ。それじゃ。ケータイに付けてればいつでもこの瞬間の思い出が思い出せるんだよ」
……俺もこの瞬間の思い出は一生忘れたくないと思った。
「そうだな。俺も正直この瞬間かなり幸せだ」
「ふふ、私本当に嬉しい」

「佳奈」
「うん？どうしたの？」
「俺、佳奈の事好きだ！たぶんこれからも佳奈以外の子を好きになることはないと思う。もし良かったら結婚を考えて俺と真剣に付き合ってくれないか？」
高校生で結婚なんて……っても思ったが、俺は本気だ。佳奈以外を好きになるなんてことありえない。
早すぎる？初デートで？そんな事知るか！
「私、古城佳奈はいつでも、いつまでも力也君の隣にいるよ」
佳奈は期待してた通りの言葉を言ってくれた。俺は目から涙が出るほどに緊張し、感動した。
「嬉しいよ。はぁ～涙止まらねぇ～……」
「私も泣けてきちゃった。嬉しい。まさかこんなにも早くプロポーズされるなんてね」
佳奈も一緒に泣きながら言った。

こんなに早くにプロポーズして長く続くわけがないと思っているやつは見とけ！絶対に結婚してやる。俺は古城佳奈を一生大切にする。これは神に誓っても良いぞ。

白泉力也と古城佳奈はこの日結婚を誓い合った。

5　誓い（後書き）

ここからどのように展開していくかが自分でも分かりませんが、少しずつヒロインの魅力が出てきて良い感じになってきたと思っています。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

古城佳奈可愛いなぁ……（ごめんなさい、気持ち悪かったですよね。はい。）

6 罪

◇◆◇◆◇◆◇
うるさく鳴り響くケータイのアラーム機能を止め、眼を覚ました。
古城佳奈にプロポーズしてからもう二日が経った。
欠伸を一つしたあと、今日からまた一週間頑張るかなと気合を入れ一階に向かった。
「ふぁ～……もう朝か……」
朝食を終え身支度を整え家を出た。今日からは毎朝駅に行き佳奈と登校することになっている。
佳奈は恥ずかしいからいいよ。と言ったのだが俺が無理やりにでも一緒に行きたいと言ったら。快く了解してくれた。あ……大輔、集合場所で待ってるかな？あとでメールでも送ってやろう。大輔には一応付き合ってる事を言ったはずなのだが……。まぁ、もう一回今度言おうと思う。

「おはよう佳奈」
眠そうな声で佳奈に挨拶してしまった。
「おはよっ！力也君、何？眠そうだね昨日遅くまで起きてたの？」
「昨夜ちょっとパソコンに音楽入れてたら寝るの遅くなったんだよ」
ジトーした目で俺の顔を覗き込んでくる。
「エッチなサイトとか見てて遅くなったんじゃないの？……ふんっ」
プイッと顔を背けながら言った。
「…………見てないって」
「何よ、今の間！」
「……ははっ、今日昼休みどうする？一緒に食う？」
「うー……笑って誤魔化さないでよ！もう！少し恥ずかしいけど一

緒に食べようよ」
「だな。それじゃ今日は俺がそっちのクラスに迎えに行くよ」
佳奈はからかっていると分かってさらにプンプンと怒っていた。
こんな風に気だるい月曜の朝を楽しく登校できる時が来るなど想像もしたことなかった。

佳奈とは教室の前で別れて自分の教室へと入って行った。
ん……？何か足りない気がする……あ、大輔……
メールを送るためにケータイを取り出すと、ハートのストラップが出てきた。ニタァ……
やばい学校でにやけてしまった！誰にも見られてないよ……な？……見られていないようでホっとした。
「お前今どこ？今日からまた学校だぞ早く来いよな」
その後メールの返事は返ってこなかった。

そして、大輔が学校に登校しないまま朝のSHが始まった。
「ん、吉見の席が空いてるな。今日、吉見は来てないのか？」
誰かが答えた。「そういえば、今日見てないですね」
「そうか、珍しいな。吉見大輔、欠席と」
その時、ガラッとドアが開いた。
(っち、このタイミングで来たか)
「吉見、遅いぞ遅刻だぞ」
教師が言うと大輔は「まだSH中ならセーフじゃないっすか？」とか言ったあとギロッと俺を睨み付けて言った。
「力也、お前なんであたり前のように先にここにいてそのうえ、いつも一緒に登校してるのに、メールで『今お前どこ？早く学校来いよ？』ってどうゆうことだよ！」
ひどく嫌なタイミングで言いやがった。皆聞いてるじゃねぇか……
これじゃ俺が悪いみたいじゃないか。

「……先生こいつに早く指導部に行かせて、遅刻届けをもらってくるように言ってください。これじゃ『ＳＨはまだ学校始まってねぇ！担任の自己満足の時間だ！』って言っていると同然です」
「お前、何言ってー」
担任が言った。
「そうだな、吉見お前のほうこそ何言ってるんだ。遅刻だ。早く指導部行ってこいバカ者」
「あとで覚えてろよ！お前！」
と言い残し指導部へ消えて行った。

その後戻ってきた大輔はうるさくなんか言ってきたが俺は、今日ちょっと寝坊したから先に行ったんだよ。と説明した。これで納得していた大輔はやはりバカなのだと思った。メールの内容は明らかにおかしいだろうに……バカで良かった本当に。

退屈な授業を淡々とこなし、昼休みになった。
（さてここからどう脱出するか……）
まずは……トイレだな。うん。
「俺ちょっとトイレ行ってくるわ」
「おう、ってなんで弁当も持ってくんだよ、置いてけよ！」
っち。
「あ、そうだな。大輔、実は俺な古城佳奈と付き合ってるんだよ」
俺はこのタイミングで言ったのを後悔することになるとはこの時一切考えていなかった。
「……は？なんか前も似たような事言ってたが……あーデジャブってやつか？」
「驚くなよ？大輔。この話は実は少し前に一回してるんだ」
「まじか？なんかたしかに覚えがあるぞ……あぁ……は？」
「それじゃ俺は行くとこがあるから。一人で飯は食ってくれ」

大輔はポカーンとしていた。昼休みの時間がもったいないから放っておくことにした。

佳奈の教室のドアを開け佳奈の名前を呼ぶ。
「佳奈～！」
別に大きな声で叫ばなくてももちろん良いのだが、佳奈の恥ずかしがる顔を見たかった。
……最近少しＳ気が出てきたような気がする……。
「ばっバカ！なんで大きな声で呼ぶのよ！」
と、赤面しながら言う。
「ははっ俺このクラスに知り合いいないからさ自分で呼んだほうが早いと思ったんだ。なるべく多くの時間一緒にいたいしさ」
笑いながら言った。
「う……そ、それならいいけど！で、でも今度からは少しボリュームを下げてっ。力也君の声なら聞き取れるから」
「分かったよ。それでどこで食べる？」
「うーん、そうね今日暖かいし、中庭とか……？」
「そうだな、あそこなら他のカップルも多いし別にいても浮かないしな」
佳奈がみるみる顔が赤くなっていくのを見ながら言った。
「早くいこうぜ、時間がもったいない！」
手を取り中庭に向かった。

その後、佳奈を軽くいじめたりしながら楽しい昼食を取った。
予鈴がなり佳奈と別れ、教室に戻ると、綾瀬さんにお願いされてしまった。
「力也、少し放課後教室に残ってて」

それだけ言うと自分の席に方へと行ってしまった。
放課後は佳奈と少しだけ遊んで帰る予定だったのが……。
（まぁ、いいかそんなに時間かからないだろうし）

午後の二時間の授業も終わり。ＳＨも終わり放課後となった。
大輔はすぐに部活に行くと言い残し去って行った。なんか、泣いてたような気もするが……まさかな。
（さて、綾瀬さんの用事終わらせて早く佳奈のところに迎えに行かないとな）

「綾瀬さん何か用事でも？」

「力也、ちょっと聞きたいことがあるんだけど良い？」

聞きたいこと？なんだろ？と思いながらも聞いてみる。

「聞きたいこと？……ん、何？」

たっぷりと時間を空け言った。

「古城佳奈と付き合ってるって、本当なの？」

…………あの時あのバカなタイミング言った俺はひどく後悔した。
……聞かれていたんだ……。
あんな軽く言ってたのを聞いて綾瀬さんはどう思っただろう。たぶん、悔しかったの違いない。一回は自分が告白したのだからあたり前だ。……佳奈と出合ってから分かるようになった感情。俺だったらたぶんぶん殴ってるところだろう。

…………どうせ言うつもりだったんだ。誤魔化さずに真実を言おう。
綾瀬さんが悲しむかもしれない。でも誤魔化すのはもっとできない。

その時ケータイが震えた。
(佳奈か……佳奈少し待っててくれ……)
俺は弱々しく心の中で言った。

6　罪（後書き）

シリアスな場面はどう描けば良いのか全然分からない……どうしよ（苦笑

こんな乱文を読んでくださいましてありがとうございました！

7　友

「ごめん、付き合ってる。言おうと思ってたんだけど……タイミングがなかったんだ」
「なんで謝るの……？別に悪い事してないじゃん！良かったね！おめでとう。」
涙声で祝福してくれている綾瀬さん。俺は何か言わなければいけないと思った。

「……ごめん」
違うこんな言葉じゃないもっとちゃんとした事を言わなければいけない。そう思ったのに頭が回らない。
「だから謝るな！！私がみじめになるだけ！ていうか、なんでよ？なんで古城佳奈と……」
俺は黙って聞くしかなかった。
「なんかしゃべってよ、なんで黙るのよ。……私のほうが力也の事好きだよ。絶対幸せにするよ？今でも好きなんだよ？」
佳奈にもこんな事を言われた覚えがあるな。そうか……告白された状況と似ているんだ。泣いているところまで一緒だ。ただ違うのは、ここは人気のない三階ではなく……人気のある教室だということだ。
そのことに今気が付いたようで
「もう一回告白したら一……あ、っ！」
言いかけて走り出してしまった。俺は追うべきなのだろうか、それとも追わないほうが良いのか……佳奈もう少しだけ待っててくれ。追ってなんて声をかけてやればいい？分からない。だが、追わないといけない、しっかりとけじめをつけなければいけないと思った。

だが、その行くを遮るように現れた奴がいた。部活に行ったたんじゃなかったのか……？
「……大輔、悪い今急いでる話なら後でにしてくれ」
「お前、何綾瀬泣かしてんだよ。言えよ。なんでだよ！！」
大輔はキレていた。
「おい、お前等帰りやがれ！早く失せろ！」
教室に残っている奴等を追い出すようにキツイ言葉で言った。
そして誰もいなくなった。

「お前には関係ないだろ、そこどけ！」
「関係あんだよ！俺が一番大切な奴が泣いてるのに見過ごせるわけないだろうが！」
「っ！……お前他の女のことばっかり言ってたじゃねぇーか。うそつくなよ」
「あいつとは小学生ん時から一緒だからな、関係が壊れるのが怖くて告白なんてしたことなかったけどよ」
「……」
黙って聞いている。
「あいつがお前に告白したのも知っている。その時はそれは仕方のないことだと思っていた。だが、お前はあいつを振った。それも許せる。だが、古城佳奈と綾瀬にどこに差がある？お前等、最近知り合ったばっかりじゃねぇか。どうゆうことなんだよ！？納得いかねぇぞ！！」
胸倉に掴みかかってきたそれを遮ることをせずに素直に掴ませた。
「……大輔お前が怒るのも今なら分かる。佳奈と出会えていなかったらこんな気持ちも分からなかっただろうな。付き合ったのは成り行きかも知れない、それでも俺が好きになったのは古城佳奈だけだ。今では佳奈の一途で純粋なところ、普段は少しクールでキツめだが俺の前では甘えてくれるところ他にももっといっぱいある。その一つ一つが大好きなんだ」

俺は正直に言葉を連ねて言った。
言い終えると大輔は胸倉を離した。

「……一発殴らせろ」
……へ？　さすがに嫌なんだが。
「……分ー」
言う前に拳を構えたので咄嗟にガードしようと腕を出す……だが間に合わない。
「いっ……っつぅ……まだ答えてなかったはずなんだけどな」
無茶苦茶痛い。軽くホントに死ねるって……。
「今の一発でチャラだ。……お前はあいつのところに行かなくていい。俺が行ってくる。……よくよく考えと俺にやっとチャンスが回ってきたってことだしな」
スポーツマンらしい爽やかな笑顔で言ってきた。
「……でもお前部活は？……やっぱり俺が行かないと解決にならないしな、俺が行ー」
言い切る前に大輔が言った。
「あ〜〜……部活かしゃぁねぇな今日は休むことにするか、俺が行くって言ってんだろ。やっと巡ってきたチャンスを摘み取んなよ」
「……そっか、それじゃ大輔頼むな」
「そんな暗い顔すんな！もう怒ってねぇよ、また明日な」
と言うと、踵を返し階段を下りていった。

何もかもを考えるの億劫になり、誰もいない教室の自分の席に座りうな垂れていた。その時ケータイが震えた。

「新着メール四通か……はは」
苦笑しながらメールを一つずつ読んでいく。

『古城佳奈』
「今終わったよ。早く来てね！」
二通目
『古城佳奈』
「そっちはまだ終わってないの？」
三通目
『古城佳奈』
「早く来て！どこにいるの？」
四通目
『古城佳奈』
「メール返信してよ！どこにいるの！怒るよ！……私泣きそうだよ……」
はぁ……俺、彼氏失格だな。佳奈をまた不安にさせた。プロポーズはなんだったたんだ。佳奈を安心させてやることもできないのか俺は……くそ！くそ！
涙が溢れてきた。
何泣いてんだよ、俺そんな事で許されると思ってんのか……！くそ……！
机に突っ伏している俺の頭が誰かにそっと抱かれた。……佳奈……こんな俺でも好きでいてくれるのだろうか。いやたぶん佳奈なら間違いなく俺を愛してくれるのだろう。俺はその優しさには甘えてはいけないと思っていたが。耐え切れなくなった。
顔を上げずに言った。
「佳奈……ごめんな。迎えに行けなくて」
「……本当だよ。私待ってたけど中々来ないから迎えに来ちゃったよ」
佳奈は頭を撫でてくれている。心地良い。
「俺さ、もしかしたらかなり泣き虫かもしれない。それでも佳奈は俺のこと好きか？」

これで最後だこんな事を聞くのは。佳奈に甘えていてはいけない。
「そうだね、力也君は泣き虫かもね、プロポーズの時も泣いてたし。でも私は力也君のことを一切嫌いにならない。逆にその泣き虫なところも好きになれる自信があるよ」
「……」
何も言えなかった俺は涙を流しながら必死に耐えていた。なにか言えば声が震えてしまうだろう。そんな姿は見せたくなかった。

十分が過ぎた。その頃には俺の涙も止まっていた。その間も佳奈はずっと頭を撫でていてくれた。
「そういえば、私が告白した時は逆だったよね。頭撫でてもらってはないけど」
「……そうだったな。頭撫でてやれば良かったな。かなり気持ちが落ち着くぞ」
「そっか、それは良かった。腕が疲れた甲斐があったよ」
「はは、ごめんな」
苦笑いして言うと佳奈は笑った。

「佳奈、前は聞けなかったこと聞いていいか？」
「……綾瀬のことだね。うん、良いよ」

俺は初めて自分の嫌な過去の事を話しても良いと思った。……これを聞いたら俺の過去を話そう。

はじめに戻れるなら戻りたいと何百回思ったか分からないあの過去のことを。

7　友（後書き）

ここまで読んでくださった方ありがとうございました！

8　過去

佳奈は、ふうっと息は吐きしゃべり出した。
「綾瀬と私は高校の部活。バスケ部で出合ったのよ。そして時が経つにつれて気づいたの、彼女はあなた……力也君が好きってことが……彼女も私が好意を抱いてるって分かってたみたいで一年生の冬休みに言ったの、『私、三学期になったら力也に告白する』私は中学の時から力也君を好きだったから、取られちゃうんじゃないかと焦ったわ。そこで彼女と喧嘩になっちゃったのよ。殴り合いの。すぐに先輩達に止められたんだけど、お互い部に居づらくなっちゃって。……今に至るってわけよ」
……あれ……何まさかここでも俺が悪いって言うわけ？おかしいな……あれ？
漫画とかでは普通にあるけど、普通、喧嘩まではしないもんじゃないの！？分からないけどさ！
「えー……っと、うん。ごめん」
キョトンとした顔で言った。
「え？なんで謝るの？」
「だって、俺が原因っぽいからさ」
「……違うよ。力也君が好きっていう気持ちは綾瀬の本当の気持ち。そして喧嘩になったのは私の焦りから生まれた嫉妬。もし、告白したらどうなるんだろう？っていう。そこには力也君が謝る要素なんて一つもないよ。これは私と綾瀬だけの問題」
それは本当なのだろうか？これは佳奈の優しさなのではないだろうかと思った。だが、彼女の眼は決して揺るがない。これは俺を庇っているわけではない。真実なのだろうと悟った。
佳奈は立ち上がり言った。
「よいしょっと、力也君……今日は帰ろう。明日一緒に謝りにいこ

うよ」
「そうだな。……佳奈……座ってくれ。次は俺が言う番だ」
雰囲気が重くなったと感じたのは気のせいだろうか。
「……聞いてもいいの？」
「……佳奈の事を聞いたんだ。俺が言わないわけにはいかない」
「……うん、そうだね。」
俺は、深呼吸をしてしゃべり出した。
「俺は小学生の頃からサッカーをやっていて、全国大会でも名前が出てくるような選手だったんだ。中学にあがってからも先輩や顧問からも信頼があった。でも、俺は少しばかり才能があったがために人としては駄目になっていったんだろうな。先輩が引退し、二年生になり後輩が入ってきた。その頃から俺は他の奴のことを見下し、ひどいことたくさん言った。……ここまでは噂で聞いたことあるか？」
ここまで黙っていた佳奈は静かに言った。
「うん、聞いた噂と一緒だよ、でも私は力也君のことを好きでいられた。なんでだろ……たぶん根が優しいのを直感で気が付いてたのかもね」
嬉しいことを言ってくれる。でもここで終わりではない。続きがある。
「そして、三年生にあがった時に怒りが爆発した奴がいた……俺の一個下の弟だ。あいつは人一倍正義感が強くいつも止めに入ってた、それでも中々止めない俺に対して怒りが爆発したんだろう。そして練習中に殴りあった。ハタから見ればただの兄弟喧嘩だろう。だが違った。弟は俺は本気で止めにきていた。俺は結果として足の骨が折れ全治二ヶ月。最後の大会には間に合うが俺は出る気はなかった。足を怪我してベンチから試合する皆を見てたら……楽しそうにサッカーしてるんだ。皆試合だってのに自然に顔が笑ってるんだ。俺がピッチにいたときにはそんな顔はしていなかったと思う。それで俺

はもうサッカーをしないと決めたんだ」

俺は過去を言い終え、思い出しあの時の孤独感を思い出した。
その時、佳奈は言った。
「あ……やっと分かった。私が力也君のことを好きでいられた理由。直感なんかじゃなかった」
不思議なことを言った。今の話しで分かることなんて……。
「何言って――」

「力也君が気が付かなかっただけだよ、練習中は分からない。でも少なくても試合中は皆楽しそうだったよ。力也君自身も皆笑ってた。私はその時思ったんだよ。『明るくて楽しそうなチームメイトだな。』って」
……そんなわけが……でも佳奈の眼は……嘘をついていない。
「でも、見下してきた連中がいたってのは本当だ。どちらにしても俺が悪いんだよ」
「それは私も否定はしないよ。でもね、ベンチも明るくて、力也君がゴールを決めると皆本当に喜んでた。まるで自分が点を決めたように」

涙が溢れたきた。……はぁ……本当俺泣き虫になっちゃったなぁ～
……くそ。あの頃に戻れたら俺は何をするだろう？またあいつらとサッカーがしたいな。次は心の底から楽しめるサッカーがしたい。どこから道を間違えたんだろうな。ちくしょう……戻りてぇよ……あの頃に……。なぁ、頼むよ神様一回だけで良いんだ。あの頃に戻してくれ……無理ならもう一回……もう一回あいつらとサッカーをやらせてくれよ。
「もう一回だけで良い……サッカーやらせてくれよ……」

自然に声に出てしまっていた。
「……大丈夫だよ。力也君本当に反省してるもん。次にチームメイトに会ったときにその気持ちを伝えればもう一回絶対にサッカーができるよ。絶対に」
なんで佳奈はそんなことが断言できるのだろうか……。
「ははっ、そうだな……って佳奈には言われたくないなぁ～……綾瀬さんとまだ喧嘩してるじゃないか」
「っう……力也君のいじわる……私は明日ちゃんと謝るよ。力也君も付いてくるんでしょ？」
「あぁ、俺も綾瀬に謝らないとな」
佳奈に過去の事を言って本当に良かった。問題は解決してないが、前に進んだ気がした。
「私緊張してきた。どうしよ、ちゃんと謝れるかな……」
「何今から緊張してんだよっ」
「へりゃっ！？」
俺は乱暴に佳奈を抱きしめた。はぁ～……落ち着く。
「佳奈ありがと。俺少しだけ気持ちが軽くなったよ。今度会ったらなんとしてでも許させてもらうよ」
「……なんか日本語おかしいよ。それに私そんな褒められること言った覚えは……えへへ」
最後に照れ笑いをしながら言った。
「抱きしめてもらうのってこんなにも気持ち良いんだね。力也君の体温が伝わってきて心が落ち着くよ」
あぁ、と言い少しの間抱き合っていた。

佳奈を駅まで送って行き。帰宅した。

今日はもう寝るか。と思った時ケータイが鳴った。
大輔からだ。
『吉見大輔』
「明日の朝から俺一人で登校かー……寂しいな……なんてな！綾瀬の事は心配すんなよ。もうお前は悪くねーから」
……大輔を友達にもって本当に良かったと今になって思った。
「でも、綾瀬さんには一回ちゃんと謝りたい」
と返信した。
『吉見大輔』
「分かった」
とだけの短い返事が返ってきた。
俺はケータイを閉じベッドにもぐりこんだ。

白泉力也は、古城佳奈の言葉のおかげで少しだけ救われた。今後どんな事が起きようと佳奈といれば乗り切れると信じて目を閉じた。

8　過去（後書き）

楽しくかけました！　シリアスな場面で楽しくかけると思ってもませんでした！

ここまで読んでくださってありがとうございました！！

9　結末

◇◆◇◆◇◆◇

「ふぁ……はぁ……あまり寝れなかったな……」

どう謝ろうかと考えて全然眠れなかった。緊張してってのもあるんだけどさ……。

一階に降りて毎度おなじみのパンを食べながら言った。

「母さん、佑稀は？　また朝練？」

驚いた顔た顔をしている。……いや、まぁそりゃ驚くか。あの事件以来、兄弟の仲が悪くなったことは両親とも知っている。

「佑稀ならいつも通り部活よ。珍しいわね。力が佑稀の事聞くの」

「あぁ、まぁ気になっただけだよ」

パンを食べ終えコーヒーでぐっと飲み干し、支度して家を出た。

歩いていると駅の前で佳奈の姿が見えた。

「おっす。佳奈」

「おはよ、力也君」

……うん、寝てないな。佳奈。

「佳奈さ〜ん？目が真っ赤なんですが？」

「昨夜ちょっとｉｐｏｄに音楽を入れてて遅くなっちゃった」

……デジャブってやつ？……うん、俺が言った台詞だよね。

「はぁ……佳奈も緊張して眠れなかったのか」

「っう……や、やっぱり緊張するよ！　ねえ、明日にしない？！」

「駄目だっての」

そう言い額を小突いた。

「痛っ……もう……分かってるよ」

まだ緊張した面持ちだったが俺にはどうすることもできない。……俺も緊張してるのにそんな余裕ねぇーよ……。

二人の会話はほとんどなく、ため息ばかりしていると学校に着いた。
「佳奈、俺教室まで付いていくから」
「え？な、なんで！？逃げないように見張りのつもり！？なんで分かったの！？まさかこれが愛の力！？」
いつもの佳奈じゃない……何この変なテンション。てか、逃げるつもりだったの？！ここまできて！？
「……うん、愛の力だよ。んで分かったか？」
「う……うん」
力なく頷いた。

佳奈は鞄を置いたあとこちらに戻ってきた。
「ふう、よし！行くぞ」
佳奈も隣で深呼吸を繰り返してる。
「よし、行こう」

俺は佳奈に三階で待っててくれと言い残し教室に向かった。
すぐに教室に行き、鞄を置いて綾瀬の机の前に立った。
「綾瀬さん、ちょっと来てくれ」
少し複雑な顔で言った。
「ん、何？昨日のこと？それならもう気にしてないよ！」
「それじゃ、俺が納得いかない。ちゃんと謝らせてくれ」
「本当にもう良いんだけどな～……」
早くしてくれ。……佳奈が緊張で逃げ出してしまう……。
「綾瀬さん、俺についてきてくれ」
あ、これじゃまるで……
「えー！それじゃまるで告はー」
急いで口を塞いだ。
「んー！んんー！分かた！分かったから。付いてけば良いんでしょ！」

色々と思い出深い人気のない三階にやってきた。
綾瀬さんはすぐに佳奈に気が付いた。
「古城さん……」
「綾瀬、今日は言いたいことがあるの」
綾瀬さんは黙っている。
「私、力也君と付き合ってるの」
「知ってるよ？そんな事。おめでとう！」
え……なんで笑ってんだ。綾瀬さんは予想外の反応を見せた。
「え、綾瀬さん……」
「綾瀬……？」
ふうっと息を吐き綾瀬さんは言った。
「もう力也君の事は吹っ切れた！そして、古城さんあなたとはもうライバルでもなんでもない！私は今大事な人ができたからね！だから――……許す！って……私もあの時は悪かったんだけど……ごめんね」
佳奈はポカーンとしていた。そして、俺もポカーンとしていた。
「え、うん、私のほうこそ本当にごめんなさい。今ではやりすぎたと反省してる」
「だからもう気にしてないって！これからは仲良くしていこ！たぶんこれからまた付き合い長いと思うし！」
？何言ってるんだ綾瀬さんは……。
綾瀬さんは振り向き俺に言った。
「それと力也！あなたは私の初恋相手『だった』んだから責任取ってよね」
責任……？
「責任って……？」
真顔で言ってきた。
「顔面一発で許してあげる」

……へ？あぁ、デジャブってやつね。
「……分一」
バコッっ！！
「っつぅぅ……あぁ、綾瀬さんってグーで殴るだね。俺、平手だと思ってたよ」
無茶苦茶痛い。昨日に続き今日も殴られるって俺ヤンキー漫画の登場人物みたい……。
綾瀬さんは笑顔で言った。
「それじゃ、二人ともまたね！」
去っていった。

佳奈と二人きりになった。
「俺……ヤンキーじゃなくて本当に良かったよ。たぶん、三日で死ぬよ」
「はは、あんな過激な事は漫画の中だけだよ」
笑いながら言った。……俺の頭の骨は結構ガチで持っていかれそうだったけどね。
「でも、釈然としないよね。なんか呆気なかったっていうか……」
「そうだね、でも綾瀬本当に振り切れた顔をしてたよ。本当に大事な人を見つけたんだね。私みたいに……」
佳奈は今ではもうすっかり第一印象とは違う。クールな子だと思ってたけどそうでもなく。本当に一途で可愛い……。最初会った時はこんな顔するなんて想像もできなかった。
「なんか、失礼な事考えてる？……私からも一発お見舞いされたいの……？」
怖い怖い怖い怖い。久しぶりに真顔で言われた。
「なんも考えてない！」
俺は即答して教室へ戻った。

そして、午前中の授業も終わり昼休みになった。
教科書を片付けている大輔に声をかけた。
「大輔、佳奈のところ行ってくるな」
すると大輔は慌てて言った。
「あー駄目駄目！、今日はこの教室で食え。古城さんも呼んで」
あ、もしかして……ふと声がかけられた。
「大輔、ちゃんと誘った？」
「あぁ、今誘ったとこ」
この二人もしかして……。
「お前等二人もしかして……？」
二人顔を合わせて口を揃えて言った。

『付き合ってる』

……言葉を無くした。
「大輔お前本当に告白したんだな」
照れくさそうに言った。
「あぁ、長い長い片思いが実ったよ」
横から声が飛んできた。
「大輔！恥ずかしい言い方すんな！力也、あなたに振られたから大輔に乗り換えた訳じゃないよ？！どちらかというと一」
大輔が口を塞いだ。
「バカヤロー！彼氏の前で昔好きだった男の事言うな！！」
その後少しだけ大輔の告白話を聞いた。話す機会があれば話そうと

思う。うん。佳奈とかに話せるといいな。
「それじゃ、佳奈呼んでくるよ」
「おう、早く呼んでこい」
「私も久しぶりにいっぱい話したいし早く呼んできて～！」
俺は笑いながら佳奈を迎えに行った。

甘酸っぱい青春。俺はこの一年を絶対に忘れない。忘れるはずがない。楽しくて、恥ずかしくて、嬉しいことがいっぱいある青春時代の事を……あ……あと痛かったことも忘れないだろう。

9　結末（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！！

佳奈と力也のイチャイチャ話を書きたい（苦笑

指摘、アドバイスくださる方いつでも募集中です！誤字脱字、感想等もいつでも募集中です！

１０　日々

あの呆気ない幕引きだった、佳奈と綾瀬さんの仲直りから（俺も関わってたんだけども……）半月ほどたった。
ゴールデンウィークなるものが近づいてきたある日の昼休み。
いつものように四人で昼食を食べていると、綾瀬さんが言った。
「力也っ、ＧＷ佳奈借りるね！」
……え？俺と佳奈とのいちゃらぶなＧＷはどうなった！？佳奈？！
「え？佳奈？！」
佳奈は、あははと苦笑して言った。
「咲が暇だった言うのよ、吉見君が部活忙しいみたいで……」
「それじゃ、俺も付いて行くってのは駄目なのか？」
大輔がすかさずに言った。
「駄目に決まってんだろ！」
「誰もお前に聞いてねぇんだよ！！」
大輔と睨み合ってると綾瀬さんが言った。
「まぁ、そゆーこと！良いじゃない、いつもイチャイチャしてるてるんだから少しくらい私と遊ばせてくれたって」
「う……」
なにも言えない……佳奈と目を合わせ儚げな声で囁いた。
「佳奈ぁ～……」
「力也君～……」
佳奈も答えてくれる。そこで大輔が言った。
「何イチャついてんだよ！お前等！」

そして、ＧＷに入った。と言ってもすることがないので寝てたのだが……。この話は今度佳奈にゆっくり聞こうと思う。

そんなＧＷも明けテストも終わり、今年で最後となる。遠足の日が近づいてきた。

「佳奈のクラスは遠足どこ行くか決まった？」
「私のクラスはまだ決めてないよ、力也君と一緒なところに行きたいけど……」
俺は考えた……そうだ可能性はある。違うクラスと遠足の行く所が同じなんてことはざらにある。
俺はそう、佳奈に伝えた。
「佳奈のクラスが決め終わったら連絡してくれ、なるべく公園とかのほうが良いかな」
佳奈は頷き。分かったと行ってクラスに戻っていった。

そしてＨＲ
「今日は遠足の目的地を決めたいと思う」
担任が言った。俺はすかさず時間稼ぎに出た。この事は大輔と綾瀬さんにも伝えてある。
「先生、その前に席替えがしたいです。右斜め後ろの大輔がいつもしゃべりかけてきて迷惑です」
「え、お前仲間売んの！？聞いてないんだけど！？」
教師は訝しげな顔をして言った。
「……白泉の言う事は良く分かった。まずは席替えをしよう。時間がないからなるべく早く済ませるように。それと吉見お前はあとで職員室に来い」
「はぁぁぁぁぁぁ！？おい、力也？！」
無視して早速席替えのクジを作ることにした。
席替えのクジを引き終え、各自が席に移動する時になって、ケータイが震えた。
お、あっちは決まったみたいだな
こそっとケータイを見る。自然公園か、よしそれなら簡単に意見が

通りそうだな。

席替えも終わり、とうとう遠足の行く先を決める時が来た。
「よし、遠足の目的地だが……もう決めてある」
よし、今だ！自然公園が良いと思います。と意見しー……は？決めてある？
「今年の遠足は、工場見学に行きたいと思う」
……バカな……遠足で工場見学ぅぅ！？聞いたことがないぞ……てか行きたくないぞ。
「せ、先生何を言ってらっしゃる……工場見学ぅ？あ！先生一人でですか？」
「何を言ってる。白泉。先生一人で行っても仕方がないだろう。このクラス全員でだよ」
……ヤバイぞ非常にヤバイ。
「あ、先生提案があります。副担任もいるんですし、二組に分けませんか？工場見学組は先生と大輔、そして綾瀬さんもいれば問題ないんじゃないでしょうか？」
「問題ないわけないだろ！！」
大輔が言った。……うるせぇ黙ってろ！
次いで綾瀬さんも言った。
「なんで私が工場見学組なのよ！！先生一人で行けばいいじゃないですか！」
……お願いもう二人とも工場見学に行ってくれよ。
「もう遅い。決定事項だ。予定変更なし。以上でＨＲを終わる」
終わった。ＧＷに続き、遠足も一緒に行けないとは……最近、佳奈とイチャイチャしてない気がするぞ？佳奈とキスなんてあの頃以来してないし。はぁ……。

そんなこんなで佳奈とはすれ違う日々を過ごした。
期末テストが終わり夏休みに入る数日前の朝佳奈が言った。

「力也君、進路どうするの？」

あぁ……そうだった。佳奈に会えないとか言ってる前に俺これからの人生決めなきゃじゃん……。

１０　日々（後書き）

すみません、今回はかなり手を抜いてる感が否めないです。これから一話二話を色々と直したいと思いまして……すみません言い訳です。聞き流してください。

今更ですが、三点リーダー？なるものを教えて頂きました。一話目から修正しましたので、なんかいつもと違う？と感じた方はたぶんこれのおかげだと思います。……本当今更ですね。すみません。

最後になりましたが、ここまで読んでくださって本当にありがとうございました！

１１　進路

佳奈からの一言で、俺は完全に忘れていた進路というものを思い出した。……俺、全然決めてないじゃん。やっぱ就職か……？佳奈と早く一緒になりたいし・・・。

「佳奈はどーすんの？」
「私は進路用紙に、力也君のお嫁さんって書いたよ」
笑みを浮かべて俺に言った。
「えぇ！？まじで？え、なんか照れるなぁ」
バカップルぷりはまだ直らない。いやこれからもこの調子だろう。
本人達に自覚がないのが痛い……。
「はは、うそだよ、ごめんね」
佳奈は笑いながら言った。
「あ、でもお嫁さんになりたいってのは本当だからね？私は栄養士の資格を取って将来美味しいご飯を力也君に作ってあげたいから調理師学校に行こうと思ってるの」
「ってことは、専門学校？ってか嬉しいなそれ、でも佳奈のやりたいと思ったことすれば良いんだぞ？」
佳奈はキョトンとした顔で言った。
「うん、専門学校だよ。え？私がやりたいことは今は力也君といつまでも幸せな生活を送れるようにすることだから、これ以外には考えてないよ」
「ははは、そっか」
俺は笑いながら佳奈の頭を優しく撫でた。

「で、力也君はどうするの？」
ははっ、返ってきた。決めてないって言うと怒るんだろうなぁ……。
「俺は～……まだ恥ずかしいから内緒」

これならごまかせはず！と思ったのも三秒間ほどだった。
「力也君うそついてるでしょ。私が見抜けないとでも思った？」
「ごめんなさい。実はまだ決めてないです」
「はぁ～……そんなことだろうと思ってたけど、どうするの？これじゃ私達一緒にいられなくなっちゃうよ？私嫌だよ？力也君と離れるの」
「だよな、俺も佳奈と離れるのは嫌だ。早く進路決めて色々と話さなきゃいけないもんな。時間ないよな」
そっか、この学校にいられるのもあと一年もないのか。この佳奈と出合った学校………。時間は待ってくれない。俺は改めてそう思った。

佳奈に、「早く決めてね。いつでも相談に乗るから！」と言われ。お互いの教室に向かった。

朝練を終えて帰ってきた大輔に聞いてみた。
「なぁ、大輔って就職だったよな？」
「うん、そうだけど？どうした？」
「いや、俺まだ進路決めてないからさ、なんとなく聞いてみただけだ、進路決まってないのまさか俺だけか？」
大輔は真顔で言った。
「間違いなく力也だけだろ、もう一学期終わるんだぞ。真剣に考えたほうがいいぞ、古城さんと一緒にいたいんだろ」
すると、綾瀬さんも話に加わってきた。
「そうだよ、力也は佳奈を幸せにしてあげなさいよね。あの子本気なんだから」
「うん、分かってる。そういえば、綾瀬さんは進路どうすんの？」
「へ？私？決めてないよ？だって女の子だったらお嫁さんって書いておけば問題ないんじゃないの？」

あぁ、ここにもバカがいた。あぁ、これが本当のバカップルってやつなのかもな。大輔の毒に犯されたか。……ん、進路、お前も決めていないって？いやいやいやいやいやいや、一緒にすんな！
大輔がへ？って言い、二秒ほど固まった。その後言った。
「咲！何言ってんの？お前までで？！」
よし、大輔そうだ怒ってやれ。大輔は続けて言った。
「俺のお嫁さん！？まじで？！」
へ？いやいや、違うって綾瀬さん進路決めてないようなもんだぞ？いいのか？ってか綾瀬さんまだ書いてないからな。大輔。
「え、誰が大輔のお嫁さんって言ったのよ！未来の旦那のお嫁さんよ！」
大輔が「えぇぇぇぇ……！」と悲痛な声を漏らしていたが俺は聞こえないふりをした。……だめだこいつ等の会話に入ると俺までバカになっていく。佳奈。これからは二人で昼食を食べような。と思っているとと担任が教室に入ってきた。……あれなんで俺の席の前にくんの？え？
「進路決まっていないバカ二人が仲良くいてくれて助かった。お前達、放課後職員室まで来い」
「ははっ、お前等本当、仲良いよな。二人して職員室に呼ばれてやんの」
俺は笑って言った。
「ははは、白泉お前と、綾瀬の二人のことだよ」
この担任なんて事言いやがる、綾瀬さんはともかくとして俺がバカ？っふ……佳奈なんとか言ってやってえくれ……泣けてきた……。
担任に呼び出し宣告を受けてから、四時間ほど経ちやっと、昼食となった。
先ほど、佳奈と二人だけで食べようと思っていたのだが、バカップ

ル二人がそれを許してはくれなかった。
「二人共怒られて当然だよ、ちゃんと放課後行ってね？力也君」
大輔に笑われながら佳奈に今朝のことを暴露された。
「はい……」
綾瀬さんはため息をついていたが、そこまで深刻そうに考えていなかった。本当にどうでも良いんだろう。……どうでも良いのか……？
「それより、佳奈さＧＷとかも一緒に遊べなかったしさ、週末デートでも行かない？」
「それより、じゃないよ。…………うん、そうだね。私も力也君とデートしたい！デート行こう」
佳奈は怒っていたが、少し笑ってくれた。よし、イチャラブなデートが久々にできる！
「あ、それなら！Ｗデートやってみない！？私と大輔と、そこのバカップルで！」
Ｗデート？まぁ、それでも問題ないか、と思い佳奈に視線を送った。佳奈も頷いてくれた。……だが言っておかなければいけない。だよな、佳奈。
『バカップルはあんた等だ！』
佳奈と声を合わせ言った。
そして俺は言った。
「まぁ、俺と佳奈は別にＷデートでも全然良いよ。大輔は？」
綾瀬さんが気が付き、あ……と声をもらした。
「大輔！一日くらい部活休みなさい！息抜きも必要だよ！」
大輔は憤慨しながら言った。
「行けるわけないだろ！！もう最後の大会近いんだよ！力也！お前空気読めよ！今じゃなくても良いだろ？！」
「それじゃ仕方ないな。綾瀬さん俺と佳奈二人でデートするよ。Ｗデートはまた今後ってことで……」
綾瀬さんは「えー……」と不満そうにしてたがすぐに諦めてくれた。
佳奈は隣で苦笑していた。

そして、待ちに待った週末がやってきた。

今年一年……いやもう一年もない。本当に色々あった学校生活も残るところあと八ヶ月ほど、いや実際に学校に行くのはあと五ヶ月もないだろう。俺は八ヶ月後にはどうしているだろう？無事に進路が決まり自分のやりたい事が見つかっただろうか？いや、それよりも佳奈と一緒にいられているのだろうか？……そんな事は分からない。ただ願うしかない。この時この瞬間の幸せがいつまでも続きますようにと……。

１１　進路（後書き）

次は久しぶりに佳奈とのデートが書けます！背中がむず痒くなるようなのが書ければ良いなと思っております。

話しは変わりますが、こんな作品に評価して頂いた方本当にありがとうございます。作者自身本当に助けになっております。

最後にここまで読んでくださった皆様本当にありがとうございました！！

追伸　ＧＷ明けからテスト前一週間なので……多少投稿が遅れますがご了承してくださると嬉しい限りです。テスト終わり次第また毎日投稿させて頂きたいと思います。

１２　衝突

昨日言ってきたので、佳奈に素直に任せることにした。
駅まで佳奈を迎えに行った。今日のデートは佳奈がリードしたいと
うせ少し早めに昼食を摂るだろうと思ったからだ。
今日は朝食を抜いてきた。時間もギリギリだったのもあったが、ど
朝起きて、身支度を整え家を出た。
◇◆◇◆◇◆◇

ほどなくして駅に着いた。駅の中に入ると、ボーダー柄Ｔシャツに
ショートパンツとニーソックスといったとても太ももが強調される
服装をしている。佳奈を見つけた。佳奈の周りに人が……また囲ま
れてる？と心配したが服装を見てすぐに三人の女子と話しているの
が分かった。
近づいて行っていいものかと悩んでいると、佳奈から声をかけられ
た。
「あ、力也君！こっちだよ」
分かってるんだけどさ、近づきにくいんだよ。それに……女子高生
の集団って少し怖くない……？
「何してるの？」
「おっす、佳奈、えっと友達？」
「うん、中学時代の友達だよ。顔知ってる子もいるんじゃない？た
しか、リコは力也君知ってるよね？」
するとポニーテールの子が驚きの声を出した。
「え！？佳奈まさか、白泉君と付き合ってるの？？」
「えへへ、実は少し前から付き合ってるの」
照れ笑いをしながら佳奈は言った。
俺は自然と挨拶をしてしまっていた。
「あ、白泉力也です。えっと、佳奈の彼氏です」

三人は色めいた声を出した。俺はどうもこの空気が苦手だったので佳奈に視線を送ると佳奈は感づいてくれた。
「それじゃ、私行くね。またメールするね」
そう言い三人と別れた。

駅を出て街に向かっている途中俺は気になったことがあったので聞いてみた。
「佳奈って意外と友達多いんだな」
「力也君もしかして喧嘩売ってる？」
「い、いえ……違う違う！なんとなく多いな！って思っただけだって」
「……部活やってたからね、多くはないけどある程度は友達いるよ。力也君よりはね。ふんっ」
「うっ……佳奈俺が悪かった機嫌直してくれ。……あ、そうだクレープ食べないか？奢るぞ」
するとそっぽ向いていた顔が俺の方に向けられる。
すると笑顔で言った。
「食べるっ」
おう、と返事して二人してクレープ屋さんに並びクレープを買った。佳奈はチョコバナナ味、俺はツナサラダ味を買った。

そして、公園に入りベンチに二人並んで食べることにした。
「クレープ久しぶりに食ったけど美味しいな」
「うん、美味しい。……力也君、一口食べさせてくれない？」
「え？うん、もちろん良いよ。……それじゃ口あけてくれ」
「……え？」
「……え？」
二人して固まった。あれ俺なんか違った？
佳奈が笑いながら言った。
「力也君、大胆だね。うん、それじゃ食べさせてもらおうかな」

……恥ずかしい。穴があったら俺は迷わずに飛び込んでいたに違いない。

「う……。あぁ、分かったそれじゃ口あけてくれ」

「あ~ん」

「き、緊張するな、なんか」

「あ~やく~」

口を開けながら可愛いらしい講義している。

俺は佳奈の口の中にクレープを持っていって食べさせた。……じっと見ていると佳奈が照れながら顔を逸らした。

「うん、美味しいね。ツナサラダ味も」

「そっか、なら良かった」

「はい、あ~ん」

「え？俺？いや良いよ！」

「あんな恥ずかしい事しておいて、私にはなんにもさせてくれないの？力也君」

目を細められ、じと~とした目で見つめられた。

「佳奈！変な事言うな！周りに人がいたら変な風に見られるぞ、今の会話じゃ！」

「そんな事より、早くあ~んして」

「う……分かったよ。はい、あ~ん」

佳奈は俺と同じようにクレープを食べさせてくれた。

「どう？美味しいでしょ？」

「うん、美味しいよ。恥ずかしかったけど」

「あ、クリーム付いてるよ。力也君」

「え……佳奈、ティッシュ持ってる？」

「ふふ、持ってるけど、今必要ないよ」

「何言ってんだよ、必要だってー」

佳奈は立ち上がり、俺の口元に自分の唇を近づけて、クリームを舐め取った。

俺は顔が真っ赤になった。

「か、佳奈！？何すんの？いきなり！」
「そ、そんなに驚かなくても良いじゃない……まさか嫌だった……？」
「そ、そんな訳ないだろ」
俺は顔を合わせられなくてそっぽを向きながら言った。

クレープも食べ終わったので、佳奈に聞いてみた。
「これからどこ行くんだ？佳奈」
「お昼ご飯は、クレープ食べたから少しの間は大丈夫？」
朝食も抜いてきているので、少し物足りなかったが当分は大丈夫だろうと思い返事を返した。
「あぁ、大丈夫」
「私、力也君とプリクラ撮りたいの。だからゲームセンター行かない？」
「プリクラ？もちろん良いよ」

ビルの四階にあるゲームセンターに着いた。
「ゲームセンターも本当久しぶりに来たなぁ～」
「私も中学生の時以来、来てないかも」
プリクラの機械の所まで行き、佳奈に聞いた。
「佳奈、俺プリクラほとんど撮った事ないんだけど、佳奈分かるか？」
「わ、私も少し自信ないかも」
「それじゃ、少し説明を読んでから中に入ろう」
機械の前に白いボードに説明が書かれていた。目が自然に大きく見える機能やら、化粧をすることができるやら必要性がない気がする機能ばかり付いていた。……もっと普通にプリクラが撮れれば俺としては問題がないんだけど……。佳奈も隣で「目が自然に大きく見える機能？……これ不自然よ……」等漏らしていた。
「よし、一応分かったぞ。普通に撮る事もできるらしいからそんな

に心配しなくて良いぞ」
「え？本当？……良かった。あんな不自然じゃなんだか嫌。あ、でもフレームとかは可愛くしたいな」
「おう、フレームとか文字は佳奈に任せるよ」
「力也君も一緒に考えて！二人じゃないと思い出にならないよ」
「んー苦手なんだが……まぁ、そうだよな」
そして、機械の中に入り色々と設定をし、フレームはハートがいっぱいついているやつにして。撮影をした。
その後、文字を書くことができるようになったで、二人で決めた文字を書いた。

この幸せが永遠に続きますように

と上部に書いた。
「ふう、良い感じになったな。プリクラ」
「うん、一生の思い出だよ。あ、ケータイちょっと出して」
佳奈の行動を予測できた、俺は素直にケータイを差し出した。
「佳奈のケータイも少し貸してくれ」
佳奈も察したようですぐにケータイを差し出してくれた。
お互い照れながら、お互いのケータイの裏側にプリクラを貼った。
「なんか、嬉しいね。このケータイは力也君と私の思い出を二つも残してるんだね」
「なんか、変な事言ってる気がするけど、そうだな。なんだか嬉しいな」

その後ゲームセンターでゲームをして過ごした。少し早いが佳奈が少し疲れたように見えたので声をかけた。
「佳奈、今日は帰るか？なんか疲れてそうだし」

「え？私疲れてないよ。それにまだこんな時間だよ。まだ一緒にいたいよ」
佳奈の顔がほんのり赤っぽい。まさかと思い額に手をあてた。……熱い。熱がある。
「佳奈、なんで言わなかった。辛いって熱あるだろ。早く帰るぞ」
「……辛くないって言ってるでしょ！？力也君は私と一緒にいたくないの？」
「佳奈！こんなところで無理してまで俺は一緒にいたくない！言うことを聞いてくれ。佳奈！」
「……嫌だよ。もうすこししか時間がないんだよ？私は一秒でも多く力也君と一緒にいたいよ」
「佳奈、頼む言うことを聞いてくれ。佳奈、高校ー」
「……もういい！私一人で帰るから！またね！」
佳奈は走り出してしまった。人混みをすり抜け、エレベーターの中へと入っていった。
俺は叫んだ。
「佳奈！！！待て！！！」
すぐに追いかけた。だが、人混みが邪魔して中々前に進めない。俺は、すみませんと言い強引に人混みを掻き分けた。佳奈はエレベーターの扉を閉めすぐに下に降りてしまった。……くそ……佳奈まだ話しの途中だったろ。ちゃんと話しは最後まで聞いてくれ……。その後階段を使いすぐに追いかけた。

人生という道があるなら決して真っ直ぐな道だけではないと思う。何個もの分岐点がありその分岐点先にも分岐点があるのだと思う。分岐点なんてちょっとした出来事があっただけでできる。だがちょっとしたことで分岐点は減ってしまうこともある。だがゴールは変わらない。先に待っているのは人生の終わりだろう。俺は直線の人生の道を歩きたくないと切に願った。……俺はこの後、分岐点が一気に減ってしまうことになる。……神様、なんで時を巻き戻してはくれないんだ？　あんたなら簡単だろ？……なんで戻らねぇんだよ……。

１２　衝突（後書き）

テスト期間に入ってあまり書けなくなってしまう前に、最後に昨日一話分だけ書いたので、掲載しておきたいと思います。

書いてて思うのですが、時間ほど残酷なのはない気がします。全人類があの時に戻れたらなぁ……と思う時があると思います。僕はその時ほど悲しい時間はないと思っています。……自分であとがき書いてて少し意味が分からなくなっちゃいました。すみません。時は決して戻らない。この事を頭の隅に置いてくださるとこの作品を書いてて良かったな。と思います。

最後になりましたが、ここまで読んでくださってありがとうございました！！

追記　感想をくださった方本当にありがとうございました。物凄くこの作品を書いてて良かったな。と思えました。感謝感激です。

13 決断

俺はビルから出た。
佳奈はどこだ。どこにいる！？あのままの状態で放っておくこともできない。
俺は周りを見渡した。佳奈の姿はない。俺は駅に方向へ走り出した。

通りかかった公園から声が聞こえてきた。
「痛い！離して！」
「早く来いよ！このアマ！ぶつかっておいて詫びの一つもねぇのか！」
「あんたがぶつかってきたんじゃない！離せ！」
「顔赤くしちゃってよ。何？誘ってんの？」
バチンッ！佳奈が平手で相手の顔にビンタをかました。
「いい加減にしろよ！このアマ！」
隣にいた二人が佳奈の両脇に立ち腕を固定した。
そして、男が佳奈に殴りかかった。

俺はその時頭の中にあったリミッターが外れた。
佳奈を殴った男を後ろから、思い切り殴りつけた。男は立ち上がらない。
「お前等、俺の彼女に何してくれてんだ！！あぁ！？」
「誰だよお前！このアマの彼氏か？あ？」
「つか、何やってくれてんの？殺すぞ！」
「お前等、ぶっ飛ばす」
佳奈はショックからか焦点が合わない目から涙が零れている。
「何言ってんの？お前、勝てるわけねぇじゃん、二対一だぞ？バカ

じゃ―」
俺は何も考えずに殴りかかった。
そこからはもう何も覚えていない。とにかく憎いコイツ等に殴りかかる事しかできなかった。……佳奈が後ろで「やめて、力也君……！」と叫んでたのも聞こえないくらいに頭が沸騰していた。

鼻血が出ているのと気がついた頃に、警察が来た。喧嘩を見た誰かが通報したのだろう。佳奈を殴った奴も含めた三人は警察が来たのと同時に逃げて行ってしまった。
そこで初めて、ボロボロに泣いている佳奈を見た。……俺は一体何してんだ。佳奈こんなボロボロになってんじゃねぇか……。彼氏失格だな。もっと穏便に済ませなきゃいけなかった。……いや、もう一回あの状況になってもたぶん俺は飛び出してたな。ははっと自嘲めいた乾いた笑い声が出た。

「……」
佳奈は泣いている。
「……佳奈、ごめんな。もう―」
俺はそこで意識を失くした。

意識を取り戻した時には佳奈の姿がなく。母親と担任と座って話をしていた。
「っつぅ……いてぇ……」
「……起きたか……お前三年だぞ、何してんだ。」
担任が冷たい声で俺に言った。
「……」
「……力也、あなたが喧嘩した理由は、古城さんから聞いたわ。母さんは怒ってない。古城さんを守ったんだもの。……後悔してない

？」
「……後悔なんかしてない。……佳奈は？」
はぁ～とため息をつき担任が言った。
「古城なら帰らせた。お前は一日入院だからな。……明日一日しっかり休め。……月曜、教室には行かずに、指導部に顔を出せ。……おそらく、停学になるだろう……」
「……はい」
母親はなにも言わなかった。たぶん俺の意識のない間に説明されたのだろう。

俺はこの時、自分の分岐点が減った事を薄々気がづいていた。……三年で問題起こす奴なんていないよな。ごめんな。佳奈、お前と一緒な道を進むのは少し厳しそうだ……。

翌日、病院から退院し自宅に着き家の扉を開けた。そこで、冷たい視線が俺を射抜いた。
「お前、何がしたいの」
「……佑稀かなんだ？何が言いたい。お前には関係ないだろ」
「……お前マジで関係ないとか思ってんの？あんな街中で喧嘩すりゃぁ、誰かに見られてない訳がないだろ。すぐに俺のところに先輩から連絡があったよ。お前の兄貴何してんだ。ってな、おかげで笑いもんだぜ。……消えてくれよ、俺の前から」
俺は心臓がきゅっとなった。何も言え返せないまま佑稀を睨んだ。
「……なんとか言えよ……クソ兄貴……」
「…………」
「……っ！」
佑稀は階段を駆け上がっていった。

車を車庫に入れて帰ってきた母さんが言った。
「佑稀の事は仕方ないわよ。……リビングにお父さんいるから行ってきなさい」
あぁ、と返事をしてリビングの扉を開いた。
警察官をしている親父はとても風格があった。……俺は親父の顔に泥を塗ってしまった。
「親父、すまなかった」
「……力也、お前は後悔してないんだろう？」
「……本音を言うと分からない。後悔していないと言ったら嘘になると思う……」
俺は続けた。
「……ただ、あの状況に何回なっても俺はあいつ等に殴りかかってる。それは間違いない」
親父は目を閉じた。
「お前等、兄弟は本当に似ているな。佑稀も言ってたよ、力也と喧嘩した時。過去に戻れたとしても兄貴を殴ってた。ってな。……力也一昨日の喧嘩の事はもう何も言わん。だが……佑稀とは仲直りしろ。寂しいじゃないか……二人っきりの兄弟なのにこんな形じゃ……」
「……うん」
それしか言えずに部屋へと戻っていった。
ベッドに仰向けで寝ていると、目からは涙が零れた。
親父の顔にまで泥を塗ったにも関わらず叱りもせずに俺のした事を文句の一つも言わなかった。母さんも何も言わずに俺の事を信じてくれた。……ありがとう……。と呟き俺は眠りに入った。
午後１２時を少し回った頃に目が覚めた。
欠伸を一つしたあと、ふとケータイを開いてみると三通のメールが

届いていた。
一つは大輔、もう一つは綾瀬さん、最後の一つは佳奈からだった。
真っ先に佳奈のメールを見た。
『古城佳奈』
「今日退院だよね。……会える？」
返信をしようとした時、ケータイが震えた。……佳奈からの着信だった。

「……おっす、佳奈」
『……力也君……ごめんね……本当にごめんね……』
「佳奈が謝ることなんて一つもないぞ。……俺は自分で手を出した。それだけだ」
『あの時私が意地を張らずに大人しく帰ってれば、あんな事にならなかった……！』
「……それは違う」
『違わない……！……力也君、私あの時に戻りたいよ。そしたら力也君に言われた通りに帰るのに……』
「…………佳奈この後、会えるか？」
「……うん」
一時間後、駅で待ち合わせをした。

駅の中で佳奈を見つけた。佳奈も気がついたようでこちらに小走りでやってきた。
佳奈は俺の胸に飛び込み、顔を埋めた。俺はその頭を包み込んだ。
髪の良い匂いがしてきた。……駅の中にいた人達の視線は皆、俺と

佳奈を見ている。さすがに佳奈も気がついて、俺の手を引いてそそくさと公園に向かった。

「……ここの公園ではいろんな事があったね、クレープを食べたり……プロポーズされたり……」

「そうだな、ここの公園ではいろんなことがあった、……あの頃に戻れたらな……」

最後の方は佳奈には聞こえないように呟いた。

「……」

「……」

お互いに沈黙が続いた。沈黙を破るように俺が言った。……これが色々と考えた結果だ。

「……佳奈……ごめんな。…………別れよう」

俺は、はっきりとした声でそう伝えた。
佳奈の息を飲む音が聞こえる。佳奈が涙を流すのが見える。……その目で佳奈が俺を見つめているのが分かる。

神様……あんたは最低だよ。人が泣いて拝んだ所で幸せにならない。神様ってなら世界中の人々を幸せにしてみろよ。できないだろ……？それくらいの力を持ってるから神様なんて言われて拝まれてんだろ？そしたらなんでその力を人々のために使わない……最低だよ本当…………俺と同じくらいにな……。

１３　決断（後書き）

勉強しないと……と思っているとパソコンの前に座り、物語を書いている自分を殴りたくなります。

ですが、飽き性の自分が毎日投稿してここまで続いたことは自分でも驚くと同時に少しだけ自分を褒めたりしちゃっています。甘いですね……。

この作品は絶対に最後まで書いていきたいと思いますので皆様生暖かい目で見守ってやってください。

最後になりましたが読んで頂き本当にありがとうございました！

１４　目標

公園を取り巻く雑踏はもう俺の耳には届かなかった。静かに佳奈に別れようと告げだ。
佳奈な泣きじゃくっていた、目は真っ赤で髪も乱れていく。ずっと小声で何か囁いている。……学校での冷静な佳奈の姿はそこには一切なく。

「……佳奈、送っていくよ。帰ろう」
「……嫌……私、次は力也君の言うことを絶対に聞こうと思ってたのに……それだけは頷けないよ……」
「佳奈……俺には佳奈の隣を歩いていく資格なんて無くなったんだ。それと……これ以上佳奈が泣く姿を見たくないんだ。ごめんな……逃げ出して」
「……そんな事ない。力也君しか私の隣を歩ける人はいないよ。……お願いだからそんな事言わないで……」
「……佳奈、最後のお願いだ。帰ろう」
「………戻りたい。あの時に……そしたら私絶対に力也君の言う事を聞いていたよ……」
俺は佳奈にあぁと肯定した。そして告げた。
「そうだな、俺も戻りたい……でも佳奈、絶対に戻る事はできないんだ」
佳奈は答えない。俺は最後にもう一度を言った。
「……佳奈帰ろう」
佳奈は涙を流しながら立ち上がった。

駅の中へ涙を流したまま入れる事は抵抗があったが、佳奈の涙は止まらなかった。
「佳奈それじゃ……元気でな」

「……また学校で会えるよ。これからだって何もか―」
俺は佳奈の言葉を遮った。
「学校で会っても、しゃべりかけない。これからはお互いの道を進むんだ。俺なんかに構うな佳奈」
「……嫌だよ力也君、力也君は私の―」
電車の音にかき消され、そこからは聞き取れなかった。
「佳奈、電車きた。それじゃ俺行くな」
俺は踵を返し振り返らずに駅を出て行った。

家に帰り気まずい夕食を摂り、風呂に入り。……俺はベッドの上で涙を零した。この一年はまだ続くのだろうか、どれだけ俺は泣けば許してくれるのだろうか。そんな事を考えてるうちに意識は遠くなっていった。

朝起きて一階に向かった。
いつものように佑稀の姿はなかった。情けない話しだが姿が見えないのが分かって少しほっとした自分に腹を立てた。……そんなんだから佳奈を……。

朝食を食べ終えた後ゆっくりと学校に向かう準備をした。担任からもらった反省文の記入欄をすべて埋め親の捺印ももらい鞄にしまった。
「母さんそれじゃ、学校行ってくる」
「いってらっしゃい、頑張ってね」
「はは、頑張ることはないと思うけど……」
苦笑しながら言った俺に母さんは笑いながら見送ってくれた。
学校に着き真っ先に指導部へと向かった。

髪をオールバックにセットしている指導部長からお説教を受けた。理由を知っていたのか説教は思ったほど長くはなかった。……分かっていたことを改めてハッキリと言われた。
「白泉、分かっていると思うが……大学に行くにしても、就職にしても随分と不利になる。理由があったとしても警察のお世話までなったんだ。そんなに簡単にいくことではないぞ」
「はい。分かってます」
「そうか……白泉お前は三日間自宅謹慎だ。良く頭を冷やして、今後の進路をゆっくりと考えろ。金曜日の終業式には顔を出せ」
反省文を提出し、失礼します。と声をかけ指導部を後にした。

玄関に行くと、大輔が待っていた。
「……大輔、授業始まってんぞ。早くいけよ」
「……お前さ正直に言うけど……かなりむかつく」
「……あぁ、俺も最近気づいたよ」
「力也お前、古城さんの事振ったんだってな。彼女泣いてたよ」
「……そっか。で？どうした。俺は佳奈から逃げ出した。もう関係ないだろ？」
「……お前もし、俺が古城さんと付き合いだしたらどうするよ普通に過ごせる自身あるか！？」
「……っ！」
下唇を強く噛んだ。
「なんとか言えよ、古城さんの隣に俺がいるんだよ！想像しろよ！どうだ！？正気でいられるかお前は！？」
「…………なんだお前、俺に喧嘩売りにきたのか……？それならもっとましな喧嘩な売り方ー」

「そんな事聞いてねぇんだよ。どうなんだよ！正気でいられるのか！？イラつかないのか！！」

「…………イラつかねぇ訳ないだろ。正気でいられる自信もねぇよ……」

「……お前はまだ古城さんを幸せにできんだよ。なんで自分からその権利を捨てちまうのかが俺には理解できねぇよ。そしたー」

「……そうだな。俺は佳奈の事が今でも大好きで……あいつの隣を歩くのは俺だけしかいない……でもまだ佳奈のところには会いにいけない。その権利は俺にはまだない」
「何言ってんだよ、お前。古城さんは一秒でも早くお前と会いたいんだよ。話したいんだよ！」
「駄目だ。……自分への罰だ。ケジメをつけてからじゃないと佳奈に会わせる顔がない。……大輔ありがとな。お前が友達で本当に良かったって思ってる」
大輔は、頑張って来いと言って俺の肩を殴った。
「……地味に痛いんだけど」
「はは、闘魂注入だ。野球部流のな！」
「……うそつくなよな、エースの肩を殴るなんて事する野球部があったら、その野球部は甲子園なんか目指してねぇよ！」

最後に大輔は、「早く過去の事なんて忘れちまえ！」と笑いながら言われ、見送られた。
……大輔に過去の事を話したことはない。だが、大輔は知っていた。噂などで知ったのだろう。それでもこれまで一度も過去を詮索することもなく俺に普段通りに話しかけてきてくれた。……佳奈といい大輔といいなんであんな噂を聞いてまで俺にしゃべりかけてきてく

れるんだろうな……。俺は涙を堪えながら帰路についた。

大輔のおかげでまた目標を見つける事ができた。

過去とのケジメをつけ、佳奈に次は自分から……告白する。これが

俺の新しい目標。

１４　目標（後書き）

こっちの路線に持っていってよかったのか！？と正直思っていますが……。

どうにか書き終えたいと思いますので宜しくお願い致します。

ここまで読んでくださった方本当にありがとうございました！

新連載も新しくやらせて頂いたのでもしよろしければ「Ｈａｐｐｙ　ｄｒｅａｍへダイブ！」も読んでみてください！こちらも二話目が気に入れば好きになってくださるかと思います……。

15　和解

「よし……そろそろ行くか」
午後４時過ぎ「あっち」の学校も終わる頃だろう。と思い家を出た。
サッカー県一位の学校の前に着いた。……弟のいる学校だ。そして……元同級生のチームメイトも数名いる……。
制服姿で来たので敷地にすんなり入れた。そして、グラウンドを目指す。ここの高校には何回か練習に参加させてもらったことがあったので迷うことなくグラウンドへ向かう。

「………」
懐かしい風景。ボールを蹴る力強い音、選手達の掛け声。どれを聞いても今の学校のサッカー部の音とは違う。これが全国でも通用するサッカー部の凄さ。

とても声がかけられる雰囲気ではない。部活が終わるまで待とうと思った時、隣に並んだ初老の男と目があった。ここのサッカー部の監督だ。中学時代にはかなりお世話になった。……あの事件を知っている人でもある。
「白泉兄か……」
「こんにちわ、前はお世話になりました」
「今日は何をしに来た？と言っても分かってる……」
と言うとマネージャーらしき女子に伝言を伝えた。
「丸山に、部活が終わり次第、丸山、馬場、寺前……白泉に俺のところまで来るようにと伝えてくれ」
はい、と返事をすると女子は走って行った。
「……ありがとうございます」

深々と頭を下げた。
「あの頃の事を忘れる事ができれば、キャプテンの丸山も少しは悩みが減るだろうしな。気にするな」
「……本当にありがとうございます」
俺はもう一度頭を下げた。

監督はグラウンド中に入っていき直接指示を出しに行った。俺は部活が終わるまで懐かしい風景を見ながら。昔の事を思い出していた。……良いもんだな。やっぱ……。そして練習が終わった。

監督の下へ四人が小走りに駆け寄ってきた。だが、俺の姿だと分かると次第に足が止まった。
俺は一歩また一歩と歩み寄る。その時監督が言った。
「お前達が納得いくまでちゃんと話し合え」
そう言うと監督は校舎の方へ向かっていった。気を使ってくれたのだろう……。

「……呼びだしてすまない。今日は謝りにきた。……すまなかった！！」
すると馬場と寺前が言った。
「やっとか……俺はもう昔の事なんて気にしてないよ。ってか力也がいてくれて良かったと思ってるくらいだし」
「俺もそう思う。エース級の選手なんて皆そんなもんだ。それくらいじゃなきゃ俺等のチームのエースなんて名乗れないと思うぞ」
「本当にすまなかった。馬場、寺前……ありがとう」
「はぁぁぁ……俺は許さないって思ってたんだがな……お前が俺等に頭下げるとは思ってなかったよ。力也、俺はお前を許す。もうこれで昔の事は忘れる。これでいいか？」
「丸山……本当にありがとう……」

「はぁ……これで満足か？佑稀」
なんでここで佑稀の名前が出てくるんだ？と思い思わず口から出ていた。
「へ？佑稀……？」
「バカ兄貴……お前が昔やってた事は俺は許せない。……でも先輩達が許すなら俺だけ怒っていても仕方がないしな。俺ももう忘れる事にするよ」
「……？すまない話しが見えないんだがどうゆうことだ？」
すると丸山が言った。
「お前、街で喧嘩したんだろ？馬場から聞いたよ。……その時の事を聞いて最初は笑ってたよ。何してんだアイツってな。でもな理由を佑稀から聞いたよ。昔のお前なら考えられないよ。彼女を守るために喧嘩するなんてな……それを聞いてお前は変わったんだ。って思ったんだ。だから謝るなら許そうって話しを皆でしてたんだよ。分かったか？……まさかこんなに早く謝りに来るとは思ってなかったが」
「……そうゆう事か……佑稀ありがとな……」
「はぁ〜……恥ずかしい台詞を良く弟に言えるな。いいから早く帰れよ。恥ずかしいなぁ！」
すると寺前が言った。
「まぁまぁ、弟君久しぶりにこのメンツで一緒に帰ろうぜ、三年ぶりくらいか？」
「あぁ、そうだな……それくらいぶりだな」
その後一緒に帰り、久しぶりに話した仲間とは楽しい時間を過ごせた。何もかもが懐かしかったそして嬉しかった。少しでもあの時間に戻れた気さえした。

家に帰ると佑稀から飯食ったら俺の部屋に来いと言われたので、風呂に入った後に飯を食い佑稀の部屋の扉をノックした。
「佑稀、入るぞ」
返事はなかった。
「久しぶりだな。この部屋も」
「そんな事いいからさ、兄貴これから進路どーすんの？」
「あぁ、考えてないな。三日間の内に決めようと思ってた」
「推薦とか厳しいんだろ？」
「推薦はほぼ間違いなくもらえないな」
「それならさ、コレ」
そう言うと佑稀はどこかの大学のパンフレットを渡してきた。……スポーツ大学……？
「これどうゆうことだ？」
「そこの大学、完全実力制。兄貴ならブランクがあっても受かるんじゃないかと思って」
「……俺がまたサッカーやってもいいのか？」
「は？何が？それ決めるの兄貴次第じゃん。……俺は別に良いと思うよ。やりたかったんだろ」
最後のほうはボソっと言って聞こえなかった。
「……考えてみるな。ありがとな佑稀」
気にすんな。と言って手を振った。

俺は扉を閉め考えた。……サッカーをやるチャンスがまだあるのか……はは、どうしろっていうんだよ。サッカーすんのがここまで怖いと思った事なんてないぞ。……また同じ過ちを繰り返すではないのか。丸山達は俺がサッカーをもう一度やると言ったら、どんな反応をするだろう。その反応を知るのが怖い……。

俺は部屋に行きパンフレットを机の上に置き、布団へもぐりこんだ。

◇◆◇◆◇◆◇

朝、いつもより少し遅い時間に起きた。そしてケータイを開くとメールが届いていた。

『佑稀』

「メアド変わってないんだな。そんな事より、練習参加するか？兄貴なら監督に頼めばたぶん練習に参加させてもらえると思うけど？」

俺は返信をした答えはすぐに出た。

「ありがとな。でもやめとくよ。俺が入ったら迷惑だろ。今年で最後の三年の邪魔はできない」

と返すとメールが返ってきた。

『佑稀』

「そっか、ちゃんと大学の事は考えておけよ。じゃ」

と返ってきた。……俺はケータイを閉じて二度寝することにした。

はぁ……起きてても嫌な事しか思い浮かばないし……。

それから俺は特にすることもなく三日間を過ごした。

◇◆◇◆◇◆◇

そして停学明けの金曜日。

「ふう……緊張するな。佳奈もこんな感じだったんだろうな」

あの後、佳奈と別れてからは会話どころかメールのやり取りさえしていない。……今日、佳奈に告白する。人生で始めての告白だ。……いや二度目か……プロポーズの順番間違ってる気がするけど……。

神様聞こえてるか？やっと少しだけ分かってきた。なんであんたが時間を戻す事ができない理由。もちろん答えなんて誰にも分からないんだろうけどな……。

15　和解（後書き）

感想のほうでは、まだもうちょっと続く……と書いたのですが友達のアドバイスもあり長々続けるよりは……！ってことで物語は終盤に持っていってます。

読者の方の意見で「続きやらねぇーかな」と思って頂いた方がいらっしゃればぜひぜひ二人の今後を書いてみたいと思っております。

最後になりましたが読んでくださった方本当にありがとうございました！！

１６　古城佳奈

学校に着くと真っ先に佳奈の教室へと向かった。
「佳奈！」
大声で佳奈を呼んだ。するとすぐに佳奈を見つけることができた。
「っ！」
佳奈は立ち上がり、走り去って行った。俺は即座に追いかけた。
校舎の三階……色々と思い出すこの場所へとやってきた。そこで佳奈は立ち止まった。
「佳奈！……言いたい事がある。いいか？」
「……聞きたくないよ。力也君。私、別れるなんて嫌……」
「佳奈……俺は」
「それ以上言わないで！！」
空気が震えた。俺はそれでも言い続けた。

「俺は、古城佳奈の事が世界で一番好きだ！だから！もし良かったら俺と付き合ってくれませんか！！」
佳奈の顔を見ると、何を言ったか理解できていない様子だった。
「佳奈、俺は最低な奴だと自分でも思う。自分から別れようって言ったのに……でも無理だった。いやだった。佳奈の隣に俺じゃない男がいるなんて想像しただけでも……いやだった。佳奈の隣は俺だけのもんだ。って思ったんだ。だから、佳奈……俺にもう一度だけチャンスをくれないか？」
佳奈の顔が次第に泣き崩れていく。
「……ズルイよ。そんなの。……それでも私は嬉しかったよ」
「佳奈……ごめん」
「はい、こんな私で良ければ付き合ってください」
佳奈は涙を零しなおも笑みを崩さずに俺に言った。
「佳奈、ありがとう、次こそは絶対に幸せにする」

「その言葉忘れないでね？これが最後のチャンスだからね……？」
「あぁ、約束する。この約束は一生守る」
佳奈は安心したような顔をし、涙で濡れた顔を俺の胸に押し付けた。
「安心するね。ここ。力也君、さっきの告白恥ずかしくなかった？」
……思い出すだけで顔が真っ赤になる。間違いなく黒歴史もんだろう。
「っう……佳奈さんそれ聞きますか……思い出すだけでもかなり恥ずかしいけど、言って後悔はしていないと思います」
「そっか。良かった。……力也君久しぶりに……」
佳奈を顔を見えないが、恥ずかしいそうにしているのが分かった。
「ん？どうした？佳奈」
「久しぶりに……き、き、キス！……してみない？」
佳奈は俺の胸から顔を離し上目遣いに聞いてくる。そんなの男ならもちろん断れる訳がないじゃないか。
「佳奈って前から思ってたけど、かなり大胆だよな」
「っ！そ、そんな事ないよ！」
「はは、良いよ佳奈。俺もしたい」
「……うー……なんかイヤラシイ……」
そんな佳奈を見て俺は自分から、自分の唇を佳奈の唇へと近づけた。
そして……自分から佳奈の唇へと自分の唇を押し付けた。

何分ぐらいそうしていたのだろう。もしかしたら数秒だったかもしれない。それくらい長く感じられた。そして『世界で一番幸せなキス』をしたと言える自信のあるキスをした。

その後も佳奈は中々泣き止まなかった。だが、その涙は悲しい涙ではなく嬉しい涙だと分かっていたので俺は無理に泣き止ませなかった。

神様って奴がいるならさ、なんで時を巻き戻してくれないんだろうな。って言ったことがあるけどさ。やっと答えが分かったよ。……今この時を巻き戻してほしくないと願っている人達がいる。それが答えだ。今の俺は巻き戻されたら間違いなく壊れるよ。この世界からドロップアウトしたくなるほどにな。神様……俺はあんたがいるって信じるよ。じゃあな、神様。俺と佳奈の事はもう心配しないでくれ。……神様に代わって俺が佳奈を幸せにしてみせるから。

「佳奈聞いてくれ」

「どうしたの？力也君」

俺は照れくさくなったり、佳奈の顔を見ると安心したりと、この何ヶ月かで随分と変わった。これからだってもっと変わっていくだろう。その変化を期待しつつ俺は佳奈に『誓い』を告げたのだった。

１６　古城佳奈（後書き）

この話でこの作品は一応完結です。インフルにかかった時に書いちゃったのも良い思いでとなるでしょう。

僕自身初の小説！ということで書いたのですがとても楽しく書けたうえ、お気に入りに登録して頂いた方もいらっしゃって本当に嬉しく思いました。１１０ポイントも入っており本当に感謝感激です。

一応完結ということにしておきました。またコメントなどで「この先が気になる」と言ってくださる方が出てきた場合などはアフターストーリーとして新たに書いてみたいと思っております。書けるならば次は、もっと文法の約束を守り、描写をいっぱい書きたいなと思っております。

もし、よろしければ「Ｈａｐｐｙ　ｄｒｅａｍへダイブ！」の方も見てやってくださると嬉しい限りです。

はい！　最後になりましたが、ここまで読んでくださった皆様……本当に本当にありがとうございました！　感謝感激でございます！！

ではまた機会があれば！

PDF小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7362s/

だからもう高校三年だって！

2011年5月19日15時46分発行